

特集 主婦とウーマン・リブ

女性解放の歩み／水田珠枝

実践報告／ウーマン・リブの運動の中から

座談会／ウーマン・リブへの疑問

ウーマン・リブも楽じゃない／奥井登美子

投稿／主婦にとってウーマン・リブとは何か



書きたいひと
考えたいひと
知りたいひと
怒りたいひと
「わいふ」は
あなたの雑誌です
あなたの中にあるものを
声にしてみませんか？
あなたは 発見するでしょう
同じことを
考えていたひとが
あそこにも ここにも
いたことを
そして
みんなで考えるとき
あなたは もう
一人ほっちではない
ということ





わいふ・143号／目次

〈特集〉 主婦とウーマン・リブ

■特集投稿	14
小林やすえ*吉羽芳子*樽角輝子*原ゆう子*小沢長太郎	
井上桂子*原圭子*西村香那子*斎藤芳枝*藤井裕子	
■ウーマン・リブも楽じゃない／奥井登美子	18
■女性解放の歩み／水田珠枝さんに聞く	25
■ウーマン・リブの運動の中から	28
■座談会「主婦が抱くウーマン・リブへの疑問-吉武輝子さんを囲んで」	32
■内助の夫⑥／ここにもいたすばらしい夫族-本間立夫さん	2
■投稿随筆／たていと・よこいと	4
野口欣子*蜂谷まさよ*田中美代子*古沢房子*小沢長太郎	
■わいふティーチ・イン／発言と論争のページ	8
四方愛子*中西淳子*富田清子*富沢あき子	
■未来小説「未知の領域」 和田好子	40
■おしゃべり	47
■合評会	50

ここにもいた すばらしい夫族

本間立夫さん



NHKの「水泳教室」で木原嬢と並んでユーモラスなやりとりをしているブルートのような先生……といえ、思い出される方も多いと思う。

YMCAの主任主事で総合体育館の館長という激職にありながら、生活者としても自立している本間さんに、このシリーズの最終回を飾っていただくことにした。

青少年の知育、体育、徳育を全部まとめて面倒みようと深く広い活動をしているYMCAの責任者ともなれば、これはもう激務。

他人が休んでいる休日、祭日に忙しいというのは仕事柄致し方ないが、最近はミーティングやデスクワークが増えて、夜更けまで解放されない毎日である。

妻の恵美子さんは東京YWCAの調布センターの責任者。こちらは地域活動が中心でまあ成人学級と想ってください、と云われるが、青少年の種々の活動、障害児プログラム、ボランティア活動、講演会、とその上、子どもの小学校のPTAの役員まで引き受けて……つまりはこの夫婦は連日大忙しのカッパルなのである。

小豆島の野外活動指導のキャンプ生活で知り合った二人は仕事を通じての交際から結婚へ。

「恵美子はアメリカで社会福祉の勉強をして資格もとっていましたし、専門職の女性と一緒になるのですから、日本の伝統的な結婚観は、私たちにはナンセンスだと最初から考えていました」

新婚当時は兵庫の芦屋住まい。妻は京都YWCA勤務とあれば、急行のない頃は連日真夜中近い帰宅。

当然、神戸勤務の夫が早く帰って食事の仕度から一切を取りしきるようになってくる。覚悟の上の共働き（そういえば、共稼ぎという表現

をさけて、共働きと強調した」とはいいながら、たいへんなことは大変だった。

妻は留学経験から「夫婦の家事分担は全く抵抗なかった」と云うが、典型的な日本家庭で育ってきた夫の方は、「仕方ないですよ。専門職の女性と結婚したんですから……」と云う心境。

結婚後二年間のアメリカ生活によって、この二人は、夫婦のありかた特に専門職を持つ妻のありかたと、日米の社会通念の差について、多くのことを学んだようである。

第一に、アメリカの主婦は第一線で活躍している人が多い。社会的に活躍しながら家庭の中もキチンとしている。これは勿論夫の協力が妻を支えているからであり、妻も、社会も何もそれに疑問をもっていないこと。

第二に、例えば勤務先で家族の為に夫が早退することは仕事することよりも優先すること。日本人の感覚からすると、ちょっと奇異ではあるが、それがごく自然に通念化していること等、この夫婦には恐らく「我が意を得たり」というところだったのでなかったらどうか。

アメリカで得たものが、後に出産、育児、そして妻が海外へ出る時に鮮やかに活きてきた。

共働きの本当の「大変さ」が身にしみてきたのは、育児という現実に向った時であった。妻は帰国して出産を機会にYWCAの初の属託になった。フルタイムは無理だが、仕事は続

けたい彼女の希望で創られた身分であった。

いざ出社となると、当然夫に育児の出番が廻ってきた。その最初の日は、母乳で育てられた子が人工乳を初めて飲まされる日であった。

しかし、母の乳房で育った子はゴムの乳首をどうしても受け入れない。細心の注意をもって消毒した補乳ビンに指示どおり調乳した夫は、泣き叫ぶ我が子を抱えて文字通り途方に暮れたのだ。親も子も汗だらけになり、何度かの失敗の後、これが最後とガツとばかりに口の中へ乳首を突っ込んだら、子どもの方も根負けしたのか吸いついてきた。たまたまその場合を目撃した同僚が「乱暴で強引な育児」と評した。

「そうでもしなくちゃ飲まなかったし、こっちの方も泣く子を見て『これは俺の子じゃない!!』とさえ思ったほどだった」とユーモアたっぷり話す本間さんだが、家庭という重大事がこの時ほど、二人の上にのしかかってきたことはなかった。

それまでは二人だけの生活だから、どう転んでも覚悟の上だったが、今度はそうはいかない人を庸って、三人が上手にバトンタッチをしながらの生活である。保育所に入れば送り迎えが、連繫プレーである。手伝いが一日でも都合で休むと、もうダメだ。

朝、電話が鳴ると思わず身が縮んだ。自分たちを取巻く全ての人が健康、家庭が円満でなければ生活が成り立たない、まるで綱渡りのよう

な生活でした、と当時をふり返って述懐する。しかし、夫は仕事をやめろとは一言も云わなかったし、妻も決してネをあげなかった。

考えたこともなかったんじゃないですかネ、イキイキして働いてますよ、仕事の鬼ですね、と夫は妻のことを評して云う。

しかし、夫の方も次第に仕事の責任が重くなり、それほど無理がきかなくなってくる時がきていた。それでも妻の仕事が広がり、講演会などの打合せだのとなってくると、やはり仕事のやりくりをして帰ってくることもある。

今年の春、妻が「青年の船」の団長として五十日留守にした時も、快く家を引き受けた。

自分の家庭の延長線上に妻の仕事があり、その先に「青年の船」を通じて世界が開けていると考えることで十二分に満足なのである。

現在ではもうかつての様に育児そのものにタッチすることもないし、拭いたり掃いたりもしなくなりつつある。しかし、必要とあれば何時でも炊事でも、アイロンかけでもやってのけるだけの実力はある。ただしキャンプ料理ですがネと屈託はない。小学校六年の娘と二年の息子は、父親とは遊んでくれるもの、と信じて疑わず、休日となれば終日つきまといてキャッチボール、サイクリングに興じる。

みるからに健康そのものの夫婦の表情からはお互いにスペシャリストとして十分に生きることでできた喜びと自信がうかがわれた。(宣城)

投稿随筆

たていと
よこいと



庭の草や木と

茨城県

野口 欣子



「あんだ達もうこんなのにのびてしまったの」三四日前に大汗をかいて刈った雑草がもう頭を出しているの、ためいきと同時に思わず話しかけてしまった。育児に追われている頃は本当にめんどろな家事の一つだったのに今は何故かたのしみになってきた草取り。いくら叱っても同じいたずらをする子供達、春先に縮んだセーターが秋にはもう小さくて着られない。

くなる程大きく育ってゆく子供達を今私は雑草の一つ一つに感じてたまらなく愛しくなってしまうのです。

さるすべりの葉がチラホラ落葉し始めると夏草もいつか姿を消し私の庭はさが始まってくる。澄んだ秋空にたった一枚残る病葉が散るまで庭はさが欠かせない私の日課の一つです。

桜、梅、その他春の訪れと共にあたたかい匂いを秘めて美しい便りを持ってきてくれる私の大切な友達。私を慰めそして励ましてくれる人達が来年を約束して別れていく庭はきの季節、毎年ちがった「思ひ出」と「歴史」を残してくる。

娘が大学に入った時から、私は秘かに八重桜の塩漬を作った。

良縁があって結納をする時は必ず私の手で作った「さくら茶」で娘の将来を祝ってやろうと……。年ごとに女らしくなる我が子を見てはこっそりと塩漬の具合をしらべたりした。年毎に新しい桜を漬ける度に、「今年こそは」「いいえまだまだ」「今年は飲まないように」「等とひとり言を云いながら漬けたものです。そして大学を卒業した二十三才の春、新しい桜の塩漬を待っていたようにそれを飲んだ日。エンゲージリングの光る娘の白い指を何と複雑な気持ちで眺めたことか。

あれから三年私はさくら漬けをしていない。竹箒を持ってさくらの木の下に来ると、あの頃のほりつめていた自分が懐しく、ふみ台に乗って大事に大事に桜の花をとった朝を思い出すのです。

庭いじりの好きな主人が一生けんめい消毒する梅の木は、毎年たくさんの実をつけてくれる。何年か以前私は我が家独特の美味しい梅干を作ろうと本を読み新聞をあさり、近所の老人に聞いたりして試みてみた。それぞれ秘伝があっ

て大変興味深いものでした。その少しずつをとり入れて毎年アタックしてみた。失敗した年は主人の方ががっかりしてしまったりで、漸く皆にはめられる程の「我が家の梅干」が出来上がりました。朝一粒の梅干を口にする時、夏の暑い日に、小梅のかりかり漬を味わう時に、主人と二人で作る「我が家の梅干」に何か充ちたりたようなものを感じるのです。

長男が小学生になった頃、主人が庭の片隅に「あすなろ」の苗を植えました。

「お前とどっちが早く大きくなるか競争だよ」何年かたってその木を負かして大きくなったと脇に立って得意気になっていた姿を昨日の事のように思い出すのも毎日の庭はきで感じるたのしみの一つです。

私の毎日を黙って見つづけてくれる庭の木々も、来年に向ってたくましく生きようとしています。又明日の朝逢いましょうね。

想い出ばかり さぐっているとお母さん前に進めないよ

みんなに追い越されてしまうよ
押されて ころんでもいいの

いいのよ

お母さんは決してころばないの
どんなに道がけわしくて
暗い どちら道でも
あなた達の手をひいて
歩いてきたのよ ころばないで

少し疲れたから
ゆっくり歩きたいの休みながら
あなた達は 歩きなさい
うしろを見ないで
どこかで お母さんが
見たことのない 花があったら
便りの中に入れてね
押し花にして

昔ばなし



横須賀市

蜂谷まさよ

昭和のはじめ頃通っていた小学

校の一学級の中の二、三人ではある
が和服に袴姿の生徒がいた。その
頃女の先生も殆ど和服で袴をつけ
ていらっしやった。男の子は絆に
縋の袴、女の子は紡績と呼ばれた
木綿かメリンスの地味な柄の着物
に、小豆色かエンジの袴というの
が多かった。

一年の時私の組にも久留米絆に
袴をはいて登校する生徒がいて、
その人はとても頭の良い凛々しい
少年であったが三学期が終ると転
校して行ってしまった。三年の頃
になると殆ど洋服姿となり、女の
子はセーラー服、ジャンパスカ
ーにセーター、ワンピースも少し
は交っていた。そして大抵は帽子
をかぶった。深目のフェルト帽、
ちょこっとのせるベレー帽、大黒
さんの帽子とか云ったバスク風の
大きなベレー帽、五、六年生の頃は
近頃の様な毛糸編みとかリボン編
みのものが流行ったものだ。廊下
のコート掛には色とりどりの帽子
がオーバーに重なって並んでいた。
パンタロンとかジーンズのない時
代ゆえ、みんな膝上位のスカート
で茶とか黒の長い靴下をはいてい

た。体操の時間や運動会の時は白
い綿の運動シャツを着た。女の先
生もだんだんと洋服が多くなり、
遠足の時は全部洋服になられた様
である。

女学校に入ると制服となり、丁
度その頃「制服の処女」というド
イツ映画があつて何かにつけて制
服の処女という言葉が流行った。
かしましい娘達のこととて先生の
仇名にも映画の中の意地の悪い教
師の名前をもじったりして、憂さ
ばらしをしたこともある。そのお
転婆女学生も帰宅後大方は和服に
着かえ、夏以外は着物に三尺帯を
しめた。

その頃女の先生ももう殆ど洋服
になられたが、入学式卒業式を含
めて六七回あつた式日にはハツと
する程気品のある紋付姿に紫か濃
紺の袴をつけていらっしやった。
中でも音楽の先生はとても綺麗な
方で、あこがれる生徒も多かった
が、五年間に数える程しか洋服は
お召しにならず、帯に袴のひもを
胸高々としていらしてほんとう
に美しかった。

和服の美しさと云えば、国宝と

も云われる武原はんさんのはんな
りとした京女の魅力、井上八千代
さんの松の木にも似たきびしい清
列な姿、幸田文さんの梅の香と気
品の中に下町風のかやっぱさを加
味した江戸前の美しさ。長着は地
味にひかえめだけれど長襦袢はび
っくりする程鮮やかな友禅を使う
と云う円地文子さん。そしてそれ
ぞれの人達に通じる事は皆足袋に
は神経を使われるそう。日本女
性の心意気の様なものを感じさせ
る。

最近の日本は四季の区別もずれ
が多く、茄子やきゅうりも一年中
あつて味気なくなつてしまつたが、
若い頃は春夏秋冬折々のけじめが
気候の上にも着るものの上にもは
っきりしていた。特にさわやかな
秋の日の初衿は格別であつた。匂
い袋のキャラの香り、もみうらの
眼に沁む様な朱の色、今はその胸
裏も殆ど白一色となりそれも味気
ない様に思う。冬に入ると子供は
大い綿入れの羽織を着せられる。
そのメリンス地に先の尖つた鉛筆
でブスッと刺すと綿がフーとび
出すのが面白くて、あっちこちと

フーとやって祖母に叱られた。忘れられないのは二つ三つ年上の近所の少女の、水色とピンクのあらい棒編のネルの着物がよく似合って、長い三つ編みのおさげにみず色のリボンを結んでいた、丁度中原淳一えがく少女像そのままの姿。それは美しき五月というゲートやハイネの詩などを口ずさんだ遠い日の一齣である。

近頃考える事



川越市

田中美代子

週一回詩吟の練習があり、十日に一回バレーボールの練習がある。数年前より私の見出した唯一つの楽しみの場であった。しかし二年間は夢中でそれらに関連した行事には参加していたが、最近ふっと思う事がある。私は悪い妻、母親なのではないだろうか。まだ幼い息子（小六・小三）二人を夫に託

し家をあけるなんて、待ちに待った日曜日の筈の夫なのに、甘えも程々にしろと。

最初の頃は進んで台所に立ってくれた主人も、火を通せばいいだけの準備をしておいても、六時頃飛んで帰ると、三人で薄暗くなつた部屋でぼんやりテレビを見ている様子、やりきれない罪悪感に苛まれる。別にこれといって文句を言う訳でもないが、やはり気になる。それとは裏腹に一方の私は言う。ダンナ様の会社の仕事（印刷関係）を一日中家庭を守りながら助けているのにそんな遠慮する事はない。堂々と楽しみ、その充ち足りた笑顔こそ明るい家庭を築く基になるのだと。でも私には出来ない。十一月末どうしても出席しなければならぬ行事がある。一言「〇月〇日〇があるんですが、一日お願いします」「ああいいよ、気をつけて行っておいで」と返ってくるのがわかっていながら言い出せない自分がもどかしくてならない。

昭和十五年生まれの私には、明治の女のような血が流れているの

だろうか。それとも見合結婚のせいなのだろうか……。

東京の吉羽さんの記事等拝見して、うらやましくなりました。

ふるさと



横浜市

古沢房子

私の生まれたところは、福岡県

であるが、もう熊本県との県境近い八女郡というところで、だんだん畑のみかん園がすうっと続いている。博多から今では高速自動車道路が走っているから一時間余りで着くが、以前は乗りつきして二時間はたっぷりかかるころであった。実家は、今父母と弟がみかん園をやって生活している。専業農家ではあるが、一応生活はやっていけるものの、最近のみかんの安値では安穩に暮らして行けないらしく、弟は久留米市まででて、造園の手伝いをしてアルバイトし

ているらしい。他の家もそうで何かしらよそで働いて収入を得ている。

弟は昭和31年生まれで小さい時から「俺は百姓する」といっていた。高校卒業する頃は、回りの友だちは農業から離れて別の職業についていったが、弟は他の仕事につく気は全然ないらしく、「俺は机の上の仕事は向かん」といっていた。そしてやっぱり卒業後みかん園をやっている。春頃から上半身裸になって仕事したりしてまっ黒である。

私は一年に一回位しか実家には行かないが、弟と顔を会わすのは楽しみである。ひょいと明日から旅行するといったら、京都まで三泊四日の旅をしてきたりして両親をびっくりさせたりしているらしいが、よく仕事もやるし、やるだけのことはしているから親ももうやかましくいってないらしい。でも最近の電話で、車の免許を一カ月はかりくらったらしく、私もちょっとばかり心配になって遠くでハラハラしている。

父も来年は還暦の年である。姉

第四人でお正月に集まって還暦祝をしてやる予定である。この父も強い人で何か事が起きてても、「どうにかなる……なるようになる」といつていた。私も何かある時はこの父のことを思い、この言葉を思い出す。実際身体的にも精神面でも私からみればとても強く、子供四人とも、どこか、よりどころとして父のことを思っている。父には、これからもうずっと長く元気でいて欲しい。

私のふるさととは、小さな七十戸足らずの山村であるが、皆そこで一生懸命生活しているのである。テレビやマスコミでは、皆都会から帰省したり、かわらぬふるさとを求めて行く人のためのふるさとというのを感じるが、それぞれの土地で生活している人はそういうマスコミの報道の仕方をどんな気持で受けとめているのだろうか。

今日も一生懸命働いているであろう父母や弟のことを思う時、胸が熱くなる時がある。あと何年か先であるかも知れないが弟もいい人を捜して欲しいと思っている。姉バカかもしれないが、弟の嫁さ

んに、あれもしてやろう、これもと、今から楽しみにしている。

今一番悲しいこと



千葉県

小沢長太郎

十何年前、選挙の時、自民党のボスらが県道で半ばおどしのドラ声をあげて豪語しているのを聞いて、くやしさと、なさけなさで一杯になった。『選挙なんかやらなくても勝つのはわかってるが、まあ中央と直結しているわが党の候補者に清い一票を』

彼らは農村の婦人たちがセンベイ一袋で買収できるのをよく知っている。私は東京からのこの部落にきて二十八年。戸数百五十、九割までが農業。私が来てから嫁の自殺者が三人でた。話によればいっとうとめにいびられたのが原因、三軒とも暮らしいい農家。

昭和三十年代の半ばからこの地

も繁栄の波が寄せて来て、進学率も高まり始め、今日ではたれでも高校へ入る。勉強するためでなく、結婚のための一つの資格を得るために。

多くの者が、この社会がよくなることを望んでいる。そのように私もた。だが私は悲観論者、人類の文明は峠を越したと考える。大國の一つかみの政治家にその運命を握られている。私は考える、人類の半分を占める婦人が早く男と全く対等の力を得るならば、きつと原爆戦争を阻止し得られると。その日が果して？

農村の婦人はロッキード事件なんか関心が無い、彼女らは幸せだ？ 都会のインテリ婦人は、頭だけで、全身で受留めている者は少ないのではないかと私は思う。

この九月一日で、私の職業家庭教師は満八年になる。七十三才の私が今一番悲しいことは、頭があまりよくない他は何の欠点もない子をくびにすることだ。両親とも教育があり、普通のサラリーマンよりも収入があつて、家庭には何

の欠点も見出せない。進学指導を職業としている私にとって、教え子が進学できなかったら生活問題。学校の先生と違って、教わる方にもあると考えると同時に、こっちにもあると考えても。

『力の限り生きん！』三友社刊貧しい中卒の一青年が綴った告白的英文自叙伝。ふとしたことから罪を犯し、七年の獄中で全く独学で英語をマスターした……驚くべき事実！ 高校生でよく英語を勉強している人なら五、六時間で読めます。私は小卒だけで職業をかけること百回、二十二年前、妻結核で死亡、つづいて長男精神病発病、十二年前長女大学入学のため私一人となり現在にいたっています。八年前、日雇も行商も身体にこたえて来たため、若い時キリスト教会で二年間教わった英語を生かし今日までつづけています。

原稿を送って下さる方へ。
書き出し、改行の冒頭は一字下げること。句頭点、「」や（）なども一字分として書いて下さるようお願いします。

発言と論争



主婦は職業か？

柏市

四方愛子

残念ながら今度のティーチインには参加できませんが、「主婦は職業か」ということは結婚以来（正確には共働きをやめて専業主婦になって以来）いつも私の頭の中にひっかかっていた事ですので、これを機会に少し考えてみました。

主婦になる前の私の職業は、ある外資系会社での英文タイプ、簡単な翻訳などの一般事務でした。自分で言うのも変ですが私はタイプに關してはかなり有能な方だと会社でも認められていたのですが、主婦としてはお世辞にも有能といえないので、専業主婦になってからはいつも何となく落着かなかったのです。自分の家事技術の未熟さを少々うしろめたく思ったり、それでも年中無休でやっているのだからと居直ってみたり、子供が生まれてみると、育児などは有能無能を超えたものだとか妙な自信を持ったり、かと思うと急に自信を失ったり、「主婦」という座にもう一つどっかりと腰をすえることができなかったのです。

「主婦は職業か」と問われますが、職業といってもさまざまなものがあります。農業のように生活そのものが職業となっているもの、工場労働者、サラリーマン、税理士や会計士のように労力や知識技術を売るもの、医者や教師のように単に技術を売るだけでなく人格的な関

わりのあるもの、芸術家や学者のようにもともと好きでやっているもの等々同じ生活の糧を得る手段でもいろいろな違いがあると思います。主婦業の中には今あげたもののどれにもあてはまる要素がありますがもし主婦も職業だとすれば、最も「査定」しにくい、つまりどれだけ報酬を与えるべきか最も決めにくいものだと思います。

最近では二つの職業を兼業する人も多く、農業をやりながら商店を経営するとか、大学教授で小説家とか、中には銀行員で作曲家などという人もいるようですが、主婦が家庭の他に職業を持つ時に限って「両立」ということがうるさく言われるのはどうしてでしょうか。人がいくつの職業を兼ねようとそれぞれの仕事に支障をきたしていないならそれでよいし両立が難しければ当人が適当にどちらかを選ぶだろうし、どちらにしても他人が口出しすることではないと思うのですが、問題が「主婦業との両立」となると議論百出で、やれ働く母親の子供への影響とか、仕事と家庭とどちらが女性の幸福につながるかと、マスコミをしょっ中にきわし、家庭を持った女性が何か業績をあげて話題になると必ず「主婦でもいっしょにやる訳ですが家庭との両立はいかがなさいましたか」とインタビューで聞かれます。主婦業と他の職業との両立というのは単にテクニクの問題ではなくモラルの問題とされているのか、それとも主婦というのは会社員、教師などと違ってわきまえるべき「身分」でもあるのでしょうか。

それにしても、これだけ価値の多様化が進んでいる現在、どうして主婦というひとつの画一化されたイメージがあるのでしょうか。私は主婦という言葉やイメージを聞いた時に、附録のいっばいいた婦人雑誌の表紙を連想して何となく圧迫感を感じるので、料理洗濯掃除育児洋裁編物お弁当作りすべて広く浅くやり、嫁にも姑にも近所の人にも悪く思われないうよう、冠婚葬祭もそつなくこなし、それらすべてが私の生き

がいですと満面笑みをたたえてにっこり笑いかけるのが「主婦」なのでしょう。

私はこのような画一化こそ最も「主婦」というものから遠いものだと思います。そしてそれゆえに、主婦は本質的にはやはり職業ではないと思います（職業と考えられる要素も多いけれど）。主婦はその家庭の中でのみ主婦になるのであって、何も世間様に対し立派な主婦である必要はない。主婦業というのは単なる技術や労働を超えたもっと人間的なものだと思います。だからよく言われる「主婦のプロになる」というのはちょっとおかしいのではないのでしょうか。もちろん、料理洗濯その他の技術をプロなみにみがこうという意味ならうなずけるは大変結構な話ですが、専業主婦なのだからプロの主婦にならなくてはと、家族の誰も望んでもいないような完全無欠の良妻賢母になろうとするのは自縛自縛というものではないのでしょうか。

ところで、社会主義国などでは主婦業をできるだけ個人から社会に肩がわりさせようというので、安く三食ともとれるキャフェテリアだとか二十四時間やっている保育所とかが整っているそうですが、私はやはり一つの家庭に一人の主婦がいて家庭運営にあたるという方がよいような気がします。これは決して女性性は家庭に帰るべきだとか、主婦は主婦業に専念しろという意味ではなく、主婦がその家庭の状況と自分の適性にあつたやり方で仕事を持ちたり勉強をしたりすることは当たり前だし、いくらでもできると思います。そんな家庭の二の次としての仕事や勉強ではいつまでたっても男と対等になれないという意見もあるでしょうが、何も必ず女性が主婦にならなければいけないというのではないので、男性も、この辺で仕事をやめて、ゆっくりと家で本など読みながら主婦業をやりたいと思う人は意外に多いのではないのでしょうか。女性も、そのうち選交代して外にかせきに出るとな

ると主婦業の余暇をテレビばかりで過ごしている訳にもいかず、主婦の交代というのはお互いのためになかなかよいと思います。

「子連れある記」を読んで

論争と発言



名古屋市

中西 淳子

中原さんのように、子育ての最中に自分の勉強や楽しみのために外に出たがったり、あるいは実際に外に出ている母親が、最近とくに増えて来ているような気が致します。昔と比べて家事も育児もかなり合理化され、家族構成も小人数になり、余暇の効用が口にはされる時代ともなつて、人の意識や価値観が随分と変ってきたせいではないかと思えます。

二年前まで私達が住んでいた横浜の団地にもそうした奥様が多勢おられ、(書道、華道、謡、舞踊といった稽古事をなさる方、テニスや卓球などのスポーツを楽しまれる方、ピアノや英語の教授をなさる方など) (あの方は……をなさっているのよ) とか「私は……を始めたの」とか「私も何かしなければ」といった具合に、家事と育児だけに専念していたのでは何だか人に遅れてしまうような、妙な焦りを感じていました。

でも私の場合、子供の事を考えるとなかなか外に出る気にはなれませんでした。必要に迫られて出かけた買物ですら、ぐずる子供をあこれ言ってなだめたり、叱りつけたりしている内に決ってイライラし

だし、もう二度と子供は連れて来るまいと思うのですから。「子を連れて出かける度に大声をあげる我が身にまた腹が立つ」というふうに、私は子供を連れて出かけるのがとても苦手なのです。子供がノロノロしているために電車に乗り遅れたり、買物をしている最中に子供が見えなくなって青くなったり、買う予定のないお菓子やおもちゃを買わされたり、こちらの都合に関係なく「オシッコ!!」と言われたり、帰りに「もう歩けない」と駄々をこねられ、オンブにダッコ、本当に子連れで出かけると私は疲れてしまいます。ですから近くの買物でも、昼寝をしていた時分には必ず寝ている間に済ませるようにしてしまし、歩きようになっって一緒に連れ出すようになってからは、散歩をさせるつもりで出かけています。

散歩だと思って出れば子供が道草を食ったりしてもイライラしないで済みますものね。自分の都合だけを考えたと腹が立つことでも、子供の立場になってみると怒っても仕方がないということが多々あることに気が付きます。でも短気な私はついカッとなってしまうことが多いようです。

買物の途中などで、両手に荷物を抱えた母親が泣いている子供を叩いたり、怒鳴ったりしている光景をよく見かけます。私も時々同じようなことをしますので、仕方がないとは思いますが、そうした光景を自分が目にするとは何か情なく、醜いことに思われます。親も気の毒なら、子供も気の毒だという気が致します。女はききわけのない子供を相手に怒鳴ったり、叩いたりしている内にだんだん傲慢になって行き、相手の立場になって考えるという謙虚な気持を失って行くのではないかしら。どうもそんな気がしてなりません。

私にとっては嫌がる子供を連れて出かけるくらいなら、家の中でできる事(料理、編物、洋裁、読書、園芸など)に専念していた方がま

たましのように思えるのです。そんなわけで今日まで仕方がないと諦めて、「何でも身を入れてやれば必ず何かの役に立つ」と自分に言い聞かせながら、狭い家の中で一人こつこつやって来ました。

入園・入学前の子供をお互いに預けたり、預かったりしている方達もおりますが、それが長期に亘ると必ずいざこざが起って来るようです。そんな話を耳にしますと、ますます人に子供を頼むわけにもいかず、結局外には出られなくなってしまいます。私自身にしてみても、自分の子供の世話だけでもうんざりしているのにさらに日を決めて他家の子供まで預かって面倒をみるということはなかなかできません。自分の子供だけなら親も多少わがままができますが、他の子供も一緒に思うとやはり気を遣いますものね。やはり子供を安心して預けるにはきちんとした制度や施設があれば駄目だと思います。女性解放のためにはまず第一に、育児からの解放を考えなければならぬと、私は痛切に感じます。育児の重要性、大変さ、それによる制約を身をもって体験している母親達が、育児の専門化、育児からの解放をもっと真剣に、積極的に考えなければならぬと思います。

我が家ではやっと下の子が三才になりましたので、来年は三年保育に入れるつもりでいます。私もこれでようやく子供から解放されて、何かできそうな気がしていますが、果して何ができるやら、まだ上の子が小学校から、下の子が幼稚園から帰って来るまでという制限つきなのです。本当に時間や子供のことを気にせずに、やりたいことをやるためにはどうしたらいいか、具体的な対策を皆様と御一緒に考え合いたいものだと思います。そうした意味でも和田さんの未来小説、どうなることかととても楽しみにしております。

心ゆたかな女の暮しはどこにあるのか、これからも「わいふ」を通して考えながら、少しずつ実践して行きたいものだと思います。



子の無い私

新宿区

宮田 清子

「子どもが欲しいと思うとき」「夢の中の子ども」の吉羽芳子様、北村七重様、私も同じ気持ちを味わって来ました。おふたかたより私は少し年長かと思えます。

子どもを生めない女性是一人前ではない。という、ある著名人のエッセイに、ずいぶん心ないことをはっきり書くものと、むしろに腹立ったことがあります。子どもが欲しくても恵まれぬ私には追い打ちをかけられた様な言葉でした。

話は少し変わりますが、「わいふ」を初めて購読致します時、編集部、H様の御好意で直接手渡していただきました、その折、H様の前に私はたじたとになってしまったのです。あの時のH様は、私の前に威風堂々として、それは大きな存在でありました。何故なのだろうとしてたじたとになってしまったのだろうか、帰る道々、家へ帰ってからも、わからないまま考えておりました。私の尊敬する碩学の友を、H様の前に立たせてみました。彼女は四十四才で独身です。私の頭の中で友も、たじたとになって、その存在は、H様の前に小さく、頼りないものでした。

あの名状しがたい大きさは一体何なのだろう。友も私も、知識や教養の高低、浅深といったことには決してひるまないのです。といいま

すのは、自分の知らぬ、ということを充分知っております故に、秀れた方の前には衿を正して、あおきみます、心のゆとりと柔軟性もっているつもりなのです。それなのにあの大ききといい、重みといい、何なのだろう、どこから来るのだろうか。

大分時を経て、はたと気づきました。

母だったのです。母という偉大な存在だったのです。もちろんH様には、編集という、知的なお仕事にその生命をもらって居られますから、その辺りからも、風格はおのずと、そなわって居られると思います。

母という名のもとにつちかわれた偉大さは、子のない私にはとうてい及ぶことのできない重みであったのです。

エッセイを書いた著名な女性の言葉を、しみじみ、真実と素直に受けとったことでありました。

しかし、子の無い女性も、母なる女性も、同じ生理をもつ女であるのです。創造の主にも手落があったようです。

子の無い女性は、その悲しみをしかと心の裏間にたたみこんで、生きていくのです。拙歌ですが、ご披露させていただきます。

子を生めぬ理り無きに子無き身の生きてゆくなり天地の間

いくたびを水天宮に詣でつつ信じ居りたり二十代のわれ

子を欲しと狂おしきわれすがごと開腹手術受く医師の云うまま

街医者の実験台とう医師みつむ総合病院の椅子固かりき

この晩に吾子を抱きたし吾子欲しき母なる性に理屈はいらぬ

同窓の友ら集いて子育てを語り居るなかわれの座のなし

といって、子の無い悲哀に明け暮れているわけではありません。女性として、更に人間として広い観点から、私の人生を価値あるようにと、常々自己を磨くべく努めて居ります。子を生み、子を育てるということによって社会に還元できない、その分を私の出来得ることで、社会の役にたきたいと、現に希望に胸ふくらんで居ります。では、よろこびの多い日々を過ぎられますよう。

~~~~~

## 皆が参加できる雑誌に

新宿区

富沢 あきこ

私も毎日新聞で貴誌のことを知った一人ですが、新聞の記事から何かを感じとって、購読してみようと思った人は、期待感も大きく（新聞という特殊な影響力もあって）それだけに、自分の考えていたものとちょっと違うナ、という戸惑いを感じていらっしゃる方があるように、新会員の方たちの発言を読んで感じました。

正直いって、私も多少、自分のイメージとは違う感じを抱きました。が、なるべく素人っぽい雑誌、そして井出信子さんのおっしゃっているように、本音を吐く場であってほしいと思います。見解の相異、意見の対立があれば、誌上討論もまた面白いと思います。

随筆、その他雑文など気楽に投稿できて「うまいなあ」とか「下手

だなあ」とか、思ったり思われたりしながら、勉強させていただける場でありたいのです。文章は、書かなければ駄目ですし、あまり専門家のようにうまい文章ばかり載っている雑誌では、ペンも走らなくなると思うのです。

わたしは「わいふ」に、皆が参加できる雑誌、そんなことを望みます。

なお、ちょっと感じたことを。

一四二号のテーマ原稿募集の項には、締切日が明記されていましたが、一四三号の原稿締切日は見当りませんでした。いつでも良いということ、わざと締切日を設定していらっしゃらないのかも知れませんが、あの「試験前の一夜づけ」の心理で、不思議と締切日がある方が、書く意欲を起こさせるような気がします。いつでも出せると思うと、そのうちそのうちで怠けてしまうのは、私くらいなのでしょう。

それから、「たていと・よこいと」欄は、投稿随筆となっていました。が、「わたしのひとこと」と「おしゃべり」は、あまり区別がつけ難く、提言的なことを前者、お便りのなものを後者とは思いましたが、この稿もどちらと指定できない気がいたしました。

一四一号で面白かったのは「わたしのひとこと」「特集投稿」「生活旅行のおすすめ」などです。特に「生活旅行のおすすめ」は、私など海外旅行と聞いただけで、縁なきことと頭から否定し、パンフレットの類も、皆紙屑籠に直行していたほどなのに、なぜか素直に、楽しく読ませていただきました。文章が素直で、具体的にサラリと書いていらっしゃるからでしょうか。こんな文を読まされているうちに「洗脳」されるのだなと思い、「洗脳されないように」改めて頑張る決意をしたところで。



# WOMEN'S LIBERATION

主婦とウーマン・リブ

## 特集

女らしさを賛美する人たちは、「私は何なのだろう」という問に対して、「トムの妻……メアリーの母」と答えればよいと云う。  
 だが実のところ、近頃の女性は、自分自身の能力も、自分がどんな人生を送りたいかということも知っていないのだ。  
 今日の女性の問題の中心をなしているものは、セックスの問題でなく、女性が自分を知っていないことである。

——ベティ・フリーダン——



★やる阿呆に

桐生市 小林 やすえ

リブ運動に参加している人が行動記録誌に、「やらぬ阿呆にやる阿呆」と書いていた。

私は「ああ、実感だわ」と思いました。やっても、やっても張りめぐらされた壁の中で、ただ動きまわっているみたいな感じにさせられてしまうからです。その壁から出ることこそ必要なのに、その壁を破ろうと小さな穴をあけたとたんに、ある女性が壁ぬりを始める。

それが今のリブ運動のような気がしてならない。

でも、私はやる阿呆になりたい。女であるから、こんなすばらしい生きがいを与えられている。しつけられた女から、自らを彫刻してゆく女になりたいし、本当の自分をさがしたいから。それらの過程には人間らしい生き方の追求があり、弱い立場の者をいたわる福祉と切り離せない行動だと思うから。

リブ運動は自分の老年の幸せと一直線につながっていることをもう一度考えて多くの女性が関心をもち、協力してくれたらうれしい。

すべてに共鳴できなくても、女なら一つ、二

つ共鳴できることが必ずあるはずだから。そこから参加してほしい。

★リブよりもっとすることが

練馬区 吉羽 芳子

ウーマン・リブとは、ほんとうはどんなことなのか、私は知りませんが、今、知っている範囲では142号S.I.さんに似たような気持を持っています。

命ほど（キザですが）仕事を大切にしている人には決して思わないのだけど、私は外で活躍している立派に見える女性に、時どき抵抗を感じるのです。偏見かも知れないのですが。

「ねえ、お家で子どもさんが寂しがっていない？ 早く帰ってあげたら？」

「今日は寒いね。お部屋を明るくして、ストーブをつけて、ご主人を迎えてあげたら？」ってなんか一言、云いたくなります。

「ディスカッションも大事だけど、おちゃわんの底、汚れてないかな？」

「もっと本当は、することがあるんじゃない？」って……。

家事とか、育児とか、めだたない面倒な仕事からのがれるために、男女平等を唱えたり、や

たらに外で仕事を持ち新しがっている女性には何だかイジワルが云いたくなります。心がけ次第で強くなれるような、何にも目立ってしなくても新しくなれるような、そんな女でいたいナ、と思います。

★到達する所は

板橋区 樽角 輝子

“ウーマン・リブ”

ある過渡的な段階で生まれてくるもののよう気がする。結局、到達する所は、人間そのもののあり方、ヒューマニズムの根源なのではなからうか。

まだこの段階に到達しない人、今、到達して頑張っている人、

もう、その段階を過ぎてすでに他のものを追求している人……色いろな人間がいる。

（熱きものを胸に抱ける38才の女性）

★女の敵は女

大田区 原 ゆう子

何度か筆をとりながら美文に圧倒されて、ホゴにしている私ですが、今日は思い切って葉書を出します。

ウーマン・リブ——よく友人との間に話題になるのですが、ある人が女の敵は女である、と

言われたように、実は私もその敵なのではないかと思うこの頃です。

学生時代には少なくとも職業婦人を夢みていたのですが、その学生である途中で母親になり形ばかりの卒業をしたのがついこの間のこと。家庭にどっぷりとつかってしまつと、甘えばかりが先立って自分の身体をはって生きる自信は今のところ皆無。社会に認められる為には、まずそれを直さねばと思います。

しかし、私事と別のところでは称賛しています。すこし、無責任ですね。

## ★「リップ」って何語？

佐原市 小沢 長太郎

よく聞く言葉、だが戦後三十年、市域とはいえ、山村に住んでいるので、火星にある小石と同じく私には縁がない。

大きな町のインテリ女達の社会運動の一種か？ 英語の職業家庭教師であり、すこしスペイン語も知っているのだが——はすかしい——リップって何語だかも知らない。

まあ庶民の私には有利なことを解しゃくしている。私、昭和初年左翼労組員だったので、女が男のドレイから解放され、初めてよい社会が完成され……と教育され、五十年後の今日まだそれが正しいと信じているから。

## ★人間としての意識の変革を

横浜市 井上 桂子

ウーマン・リップという言葉がもつひびきはあまり快いものではない。その主張はわからないことはなく、もっともだと思ふことが多いが、いかにも闘争的で弁舌たくましく難解な用語をよどみなく駆使して全てを理づめて解釈し、その理に一分のスキもないことを誇っているような聡明な女闘士の姿が目にかんて、一瞬背をむけたくなるのである。

本来、女性解放とは人間解放の一面であり、存在の原点に立ちもどれば必然的に出てくる問題である。女というより、広く人間としての基本的な認識に立ってものをみる意識の変革こそが必要であり、その変革は過激さや派手さとは無縁のもののような気がする。

## ★女の子は短大へ？

横浜市 原 圭子

ウーマン・リップという言葉に一種の軽侮のひびきを感じます。でも女性の地位を考える時、まだ当分の運動は必要があると思うのです。女性も男性も区別なく人間として認め合う社会には、まだ程遠いと感じております。

子どもが大学を選ぶ時、「女の子は短大位の

方がよい、男の子はやはり四年制の大学でなければ」とお母さんどうしの話をよく耳にしました。

ウーマン・リップと短大!!

昔とちっともかわらないと思います。

## ★私たちの主張をしよう

新宿区 西村 香那子

ウーマン・リップといえば中ピ連、榎美沙子、ワイドショー、もはや芸能タレント。それから新聞・雑誌・テレビに、入れ変り立ち廻り、華々しく現われる四十代の女性評論家たち、犬養智子、桐島洋子、俵萌子、樋口恵子、吉武輝子諸氏……。

ある種の男たちは、口を開くと、「女にのさばらせたらろくなことはない」「女に何ができるか」とののしり、「古来、女に哲学者がいない、数学者がいない、天文学者がいない、音楽家がない」などと実証めいたことをわめきたる。

確かに男女の平等はあっても男女の同質性はない。女性には男性のように見果てぬ夢を追いつける生命構造を持ち合わせていない。妊娠すればおなかは見ると大きくなってしまう。出産すれば止めどもなくお乳が溢れ出てしまう。しかしこれはハンデではない。この時期をのりこえて社会に働く女性達は、男性には意識でき

ない力を持っているはず。

とにかく、弱肉強食、優勝劣敗（能力主義）に、いささかの疑問もはさまずつっぱしってきた男たちが作りあげてしまった今の社会、暴政、公害、戦争に、命の危険を感じないではおれない女たちの気持を、大ゲサに主張しなければならぬ。今まで、女たちは余りに黙りすぎていた。

中ビ連よ永遠に、女性評論家たちよ永遠に、そして、ほんもののウーマン・リップの雑誌「わいふ」万歳！

## ★ウーマン・リップとおかみさん

大田区 斎藤 芳枝

おかみさん、と言っても昔のように家事の奴隷のようなことはなく、ささやかながら余裕も余暇もあります。それなのに、

「家事に追われて……」

という言葉をよく口にします。

それは、おかみさん自身が家事から離れたがらないせいです。家事という隠れ蓑の中に入りこんで、良妻賢母の大義名分を掲げた生活が、その中に在る限り安穩だからです。そして、その中からはみ出た女性を「不幸な人」と決めつけたがります。鼻持ならない自負とぐちっぽさを持っている私とおかみさん。

このようなおかみさんの造った家庭と、男性

たまに  
早く帰るくんば……



画・西田 淑子

犠牲にしました。

家庭からは、青少年問題という反社会的な人間が育ちました。

ウーマン・リップとはそのような社会・家庭から造反したものでないでしょうか。女性が男性社会に新しい活路を開こうとしているようです。その発生には現代文明への深刻な反省と男女両性の特質の再認識という基点がありました。

ところが、それがウーマン・パワーとして社会に広がると、出発が無形な精神的なものだけに、おかみさんには理解できないヘンなものになりました。エコノミーのような有形的なものなら、賛否は別として理解し易いのですが、高層ビル、テレビ等と成果がすぐ形に現れない精神的なものは、ただ奇異に感じられてしまします。そして抵抗も強くなります。

ウーマン・リップは、男性の従属物に甘んじている女性が、主体性を持った人間としての自由を主張しているのではないのでしょうか。

勿論、人間としての自由を主張するからには、その女性自身、深刻な自覚があることが条件です。

正しく認められるまでは、きっと長い苦しい戦いがあると思います。その自覚が不足した場合は単なる奇異な行動に走り、ひんしゆくを買ってしまうことになります。

ただ、ウーマン・リップ運動は正しく行われたとしても、誤った発想で行われても、おかみさ

んには同じようにへんなもの、と思われてしまうようです。

かなり好意的な見方をしているかも知れませんが、現実の青少年問題を考えますと、それを育てるおかみさんが、家事のみを自分の生きる場とし、家事なくしては自己の存在理由さえ無いかのように思い込んでいるのでは、あまりにもお粗末ではないでしょうか。社会問題、教育問題も、家庭と同じように人間の間です。おかみさんと人間のはずです。

清潔な衣服、温い食事は大切なものには違いありませんが、人間はそれだけがきちんとしていればよい、というものではありません。他のいろいろな面を無視されてしまうと、せっかくの衣食も嫌悪感さえ与えてしまうものです。

自負の強いおかみさんはその辺のデリカシーには気付きません。

未婚の母、外食女性等をおかみさんの立場を基準にして非難するのは狭い考えだと思います。大切なのは、未婚の母、外食女性、良妻賢母等々というレッテルではなく、どんな人でもその人と接した時の会話の楽しさ、思いやりある行為ができる、ということではないでしょうか。ひよわな面と、無限の力を持つ面を持った人間。人と共に幸せになろうという面と、人を最も不幸にし得る面を持つ人間。同性間でも、異性間よりも大きな違いを持つ人間。面白く、悲しい人間。

男性、女性という特質を認めながらの男女平等とは、やはり男・女以前の人間という立場で考えなければならないことと思います。

平等とは要求によって得られるものではなく、相手を認めることによって得られるものではないでしょうか。自分のことさえ分らないのに、相手のことなんか知るもんか、という野蛮な気持から、相手を思いやるデリケートな気持を育てることが人間の向上というものではないでしょうか。

一人一人が人間というものの自覚を深めることが幸せにつながると思います。

(53才のおかみさん)

## ★毎日の生活の積み重ねこそ

横浜 藤井 裕子

「ウーマン・リブ」が何を目ざしているのか私にはよくわかりません。女性の存在を世に知らしめる、ということでしょうか。

ともあれ「ウーマン・リブ」と周囲に対して騒ぐ人々のうち、どれだけの人が、その本論をふまえ、自ら考え研究し、自分の意志で行動しているのでしょうか。学生運動に参加する人達の多くが他人の受け売りなのにも似て(少し極論ですが)、「ウーマン・リブ」を唱える女性の多くが、自分の必要性ののっとなって活動しているように思っている実、他人の受け売りのよ

うな気がします。

毎日の生活をしっかりと自分の手に握り、とかくないものねだりする自分を打ちくたさながら現状においてベストを尽くす。まず私は、それがしたいのです。ですから、マスコミが色いろと「ウーマン・リブ」を伝えても、今の私には、それに共感しているヒマがありません。

そうして、そうしたマスコミの情報に時おり手を休め、頭を振ってつぶやくのです。

——ピル解禁？ でもあの人たち、ピルによって生ずる副作用を知って言っているのかしら？——職場における高いポストをよこせ？ でもあの人たち、今の仕事を十分にやって、そのポストを活用した上で言っているのかしら？ etc. そして、みんな現状でベストを尽くしてその上であしたことを言っているのかしら？……とため息をついて終るので。

でも、こうして毎日コツコツやっている私の生活(人生)こそが、結局は、「ウーマン・リブ」も求めているであろう、本来の人間(女性も含めて)の生きがいにつながっているような気のする今日この頃です。

もっともこうした私の考えは、まだ子供もなく、自分のプライベートな時間をつくり出せ、外での仕事もあれば、個人的活動もいくつか出来る上、庭づくりや編み物、読書などが出来るという恵まれた人間のものかもしれませんけれど……。

「あんだ、この家に嫁に來たいじょう商売を生  
きがいにしてくれなくちゃあ、あんだは薬剤師  
なんだから誰がやっても出来るくだらないこと  
はやらなくてよろしい。掃除洗濯はほかの人に  
まかせなさい。たまにやる時は、ほら、この通  
り……」

姑は私の見ている前で、畳の上に敷いたうす  
べりをひよいともち上げると、勢いよく、きわ  
めて大ざっぱに掃いたゴミを、その下につっこ  
んで、再びうすべりをかぶせてしまった。どう  
やらきしにまさる相手らしい。

学生時代、私はこの家の長男である義兄の教  
え子だった。学生の中にはひまにまかせて教師  
の私生活を調査し、それに多少のオヒレをつけ  
て、クラスの人たちに披露する、おせっかいで  
にくめない人がいるものらしく、私も、そのよ  
うな友達の人から、奥井先生のお母様は東日  
本女子薬業界の理事で、茨城県の女子薬剤師会  
の会長さんで女子薬剤師が集まる席では演説の  
一つや二つはする名士であること。外国人の友  
達も多く、英会話が得意で霞ヶ浦に昔、ドイツ  
の飛行船ツェッペリン号が來た時は通訳として  
活躍し、その上優雅にピアノを弾きこなすこと  
の出来る才女の、家つき娘で働きものの養子を

## ウーマンリブも 楽じゃない

奥井 登美子

(カット：野口 淑子)

迎えたけれど御主人はあってなきがごときウー  
マンリブである……などということを噂のかた  
ちできいていた。なぜドイツの飛行船に英会話  
が必要なのか、人の噂というものの、かなり無責  
任なものがあるにしろ面白い人物であることは  
まちがいないらしい。

私たちの結婚のアクセルを踏んだのは義兄で  
ある。結婚してまもないある日、私は義兄にき  
いた。

「おにいさんの教え子はたくさんいるでしょう。  
なのになぜ私に白羽の矢をたてたの？」

義兄はこともなげに答えた。

「うちのおばあちゃんみたいなさうごいのと対決  
するんだからな。よほどの心臓のもち主でない  
と釣り合いがとれないと思ったのさ」

私のウーマンリブバァさんと対決する心臓の  
強さだけが取柄だったらしい。

「お姑さんのいる旧い家にいってどうするの」  
「東京生れのあなたが田舎にいられるものです  
か？」

「長男も次男も三男もやらない薬局を、商売を  
やったことのないあなたがやるなんて無茶よ」  
友達の忠告はありがたかったけれど、私はウー  
マンリブバァさんのハツラツ振りに興味をそ  
そられた。そして、そのバァさんに育てられた  
息子たちなら女の人を不当に差別したりするよ  
うなことはしないだろう。私のねらいはそんな  
ところにもあった。果して、二、三日一緒に生



活してみて、姑の、そのききしにまさるウーマンリブ振りに、さすがの私も、いささかドギモを抜かれた。

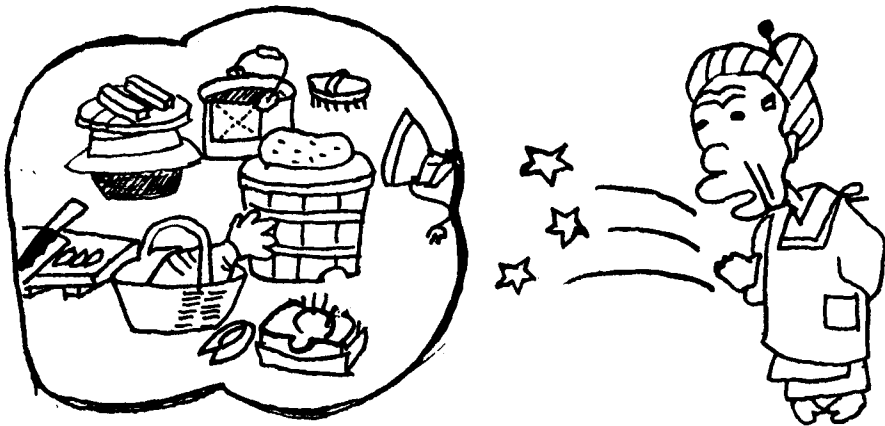
台所仕事は大嫌いだという。いうだけでなく決してやらない。針仕事も大嫌いだという。これもいうだけでなく決してやらない。そのくせ姑のいとこの経営している奥井和裁学院の校長先生である。何も教えることは出来ないから、演説の必要な時だけ出かけていく演説専門の校長先生らしい。

演説は大好きで、ことあるごとに演説をやりに行く。しまいには一対一で話をする時ですら姑は演説口調、大きな声で、ドンと机をたたいたりする。

演説の次に好きなのが数学と化学。長男の時も次男の時も、息子の旧制高校受験の時の数学のヤマは私にかけてやって見事あたったのだというのが自慢らしく、七十才すぎてもそれらの問題をよく覚えていて、時々紙に数学の方程式や化学の反応式などを書いて私に説明してくれたりする。

英会話も、日本人ばなれしたゼスチュアで外国人の友人とまるで抱きあわんばかりによろこんだり手を握ったり、実に楽しそうに活き活きと豊かな表現力にみちみちている。

そのくせ、普通の人が当然出来るような簡単なことが出来ない。たとえば果物の皮がむけない。たまにむいたとしても、すごく厚くむいて



しまうから食べる所が少なくなってしまふ。私にむいてくれという。そういう時私にも半分、あるいは四分の一くらいはくれるのかと期待して待っているけれど、大抵はくれない。

「果物は自然がくれた神様のプレゼントです」なんていいながら、全部自分で平けてしまふ。缶詰の缶が開けられない。缶切りと缶をもつて舅か私を探している。

トイレットペーパーをホルダーにはさみめない。姑がとりかえたペーパーはまるで二、三才の子がいたずらしたあとみたいに、便所中に巻紙のたうちまわっているのである。生活そのものがきわめて現実的、即物的で「ゆとり」とか「あそび」に類することはすべて無視してしまっている。

急須の口が欠けてしまった。何となくつきにくいし、第一、口が欠けた食器をそのまま使うというのが私には耐えられない。私が捨てた急須を姑はひろって来て、まだまだ使えるものを使わないとはけしからぬという。次に今度はその急須のフタが割れてしまった。

やれやれ、今度こそは捨ててくれるのかと思いきや、姑は前に本体が割れて使えなくなった急須のフタばかり二十数個もとっておいてあって、その中からサイズのあうものを探して来て、もようも色もチグハグのまま平気で使っている。人間の使い方も急須同様、きわめて能率本位、機能本位である。商人のおかみさんはよく働く。

姑も決してじっとしていない。くるくるとよく動いて、普通の人の二倍くらいは動いているけれど、更におどろいたことには囲りにいる人間をも、片時もじっとさせておかない。

舅や私に対しても同様で、次々と息つくひまのない程の仕事をたのむ。

ジイさんは地球のまわりをぐるぐるまわる人工衛星みたいに、リブバァさんのまわりを片時も休息することなく、すごい速度でくるくるとはしりまわっている。ものを考えたりゆっくりお茶を飲んだりほんと一息つく間もあらばこそすごい勢いである。

せめて食事くらいは落着いてと思って、「私が店番しますから、お二人どうぞ」とすすめても、

「私、おじいさんと一緒に食事するくらいなら店番の方がいい。あんたやりなさい」

私に押しつけて店に出してしまう。姑には常にイエを守り家業を盛りたてるといふニシキの御旗があり、舅もそれに従っている。

### 「リブバァさんの性」

ある日、高校生の娘が男の友人を三人、トラップの遊び相手として連れて来た。それを見てしまった姑は血相をかえて私をよび出した。「登美ちゃん、ちょっと、おすわり下さい」

「はい」

「奥井家十五代、男の好きな女はいませんでし  
た」

「はい、どうしてそれが……」

「男好きなのは、加藤の血ですか」

「そうかも知れませんが。加藤家一同、男は女が大好き。女は男が大好きなんです」

私としては当り前のことを云ったはずだったのに、普段、あれほど気丈な姑が、二、三日寝込んだのは、よほどのことにちがひなかった。

姑にとって性は、イエのための子孫を残す性。社会に役立つ人間を生むための性以外の何ものでもなかった。性の問題については、きわめて貧しい発想しかもち得なかったらしい。

### 「生理現象」

私が初めて妊娠をし、微熱と吐き気で少々ゲンナリしている時、姑は私をよんでこういった。

「お産は生理現象で病気ではありません。動かないとつわりになるけれど働けばつわりなんか直ってしまします。ウンコやオシッコと同じで、時がくれば心配しなくても自然に出てくるものなのです。ウンコの方は自分で出てくるという意志をもたないから時々便秘もするけれど、赤ん坊は大したもので、自分自身でかきわけかきわけ出てくるのだからウンコより簡単、ツウー



と出てストン。これで終りです」

至極もっとも、実に明解な理論である。

薬の配達をするのだから自転車くらい乗れなくはないけれどもという姑の命令、丁度妊娠三ヶ月ぐらいのときに自転車の猛練習をし、運動神経のぶい私は、タンポに落ちてドロだらけになってしまったこともあった。やっと乗れるようになると、配達に行かされ、従業員と全く同じ、かなり重い荷物をはこんだりしたけれど何ごともおおらかなかった。こうなってくるとウーマンリブバァさんの靈頭あらたかで、心強いこと、たよりのいいのあること、姑のいう通りにしていれば何ごととも無事に終るような気になってしまった。さて、子どもが生まれた。姑は専用のお手伝いさんをたのんでくれたり、お乳が出るようにと、特大のボタモチを注文してくれた。り、少々おしつけがましいけれど涙ぐましい程の親切で私を感激させてくれた。

いくらドライなバァさんでも、こと孫に関する限りウェットなんだなあと思ったトタン、「はい請求書。全部たてかえておきました。利

息はいらない。内祝の品で、うちにあったものですませたのは大体の値段で計算しておきました」

### 「経済の自主独立」

商人のおかみさんらしく経済的には割り切っていた。

「あんたの月給は家賃と食費で帳消しですよ」  
我が奥井薬局の取締役にそういわれてしまうと、唯一の取締られ役の私は何もうことない。

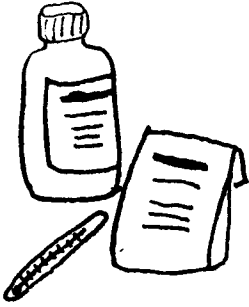
亡くなる一年四ヶ月前、心不全に肺炎をおこして意識不明のまま救急車で入院したことがあった。

「私は死なない、絶対死ぬものですか」

叫びつづけて何日めかに意識が回復した時私にいった。

「お金をもって来てちょうだい」

「だって病院にいるのに、いらなんでしょう」  
「ため、お金なくちゃ淋しくて」



亡くなる日もそうだった。その日に亡くなる人とは思われない程しっかりしていたけれど、銀行の人が印をもらいに来た時、とてもどかしい。私が

「おじいさんに出してもらったらどうですか」といったらしかられた。

「これは私の印です。おじいさんとは関係ないの」

姑はついに亡くなる日まで夫と独立した主体性を、自分の経済と共にもっていた。それはすさまじい程の執念だったと思う。

### 「タテ社会が支えた

明治女のウーマンリブ」

姑はついに一生、自分の嫌いな台所仕事をしないで過してしまった。そういう女の人を私ははかに知らないから、姑を偉いと思う。

閉鎖的な小さな田舎町の、古い商人の家に生きて、親類や従業員にうしろ指ひとつさされず、姑なりのウーマンリブを貫き得たのはイエというタテの人間関係に支えられて、家業という大義名分を守ったからなのだろう。

商人の家の伝統的な生活のチエの中に、女主人が経済の実権を握っていた方が家業が栄えると思われていたことだろうと思う。八人姉妹の長女に生まれて、商人のおかみさんとして純粹培養されたような姑の中にたくましい経済

観念と、きわめて貧しい性の論理が混在し、姑の独得のウーマンリブを確立したのだと思う。

### 「私のはじめて知った男たち」

ウーマンリブのおふくろに育てられた息子と結婚した私は、かなり特別な実験動物を一匹、手に入れたことになる。実験動物とあるからには、他の動物と比較検討してみなくてはなるまい。

私のはじめて知った男性は二人いる。オヤジとアニキである。

父はどういうわけか福沢諭吉の大ファンで、おそらく日本婦人論など若いうちから読んでいたにちがいがなかった。

私は高校時代、もうれつな勢いで母に逆った。「今のままのお母さんなら、女中とちっとも変わらない。たのんだことは何でもハイハイやってくれるけれど、やることをすべて自主性がない」などといって喰いついた。

その時、父は私にいった。

「かあさんのような女になってもいいから、かあさんは素直な大人しい女だといわれ姑からはめられたけれど、右向け右といわれれば黙って右を向く女なんだ。それというのかあさんには自分に経済の実力がないから卑屈になるんだ。独立自尊といくら口ききただけとなえて

も精神の自尊には経済の独立がともなわなくては意味がない。私はお前にかあさんのような女になってほしくない。夫とわかれても、未亡人になっても、一人でやっていけるように薬剤師になってもらいたいと思う」

「私は結婚なんかしないから未亡人にもならないわ」

「それならなおさら、経済の独立が必要じゃないか」

「大人はすぐそう経済経済と、お金のことがかりみたいでいやらしい」

私はそういつて父にも逆った。

父は口でそういっただけあって、女だから男だからというだけで兄と私を差別することはなかった。戦後、疎開先から帰って来た一時期、父と兄と私と三人きりで共同生活をしたことがあった。私と兄とは十才年齢がちがうから兄は大学生。私は今でいう中学生である。父は炊事当番も何もかも平等にきめた。兄はある日私に、宝ものように大切にしている白のトックリセーターの洗濯をたのんだ。私はその時まで、生れてこのかたセーターの洗濯などしたことがなかった。どうしたらいいのか全く途方にくれてしまった。形をくずしてはいけないというので私は仕方なしに真裸の上にそのセーターを着こんで、そのまま風呂に入った。そのまま洗えば形がくずれないですむと思ったのは少々アサハカであった。ぬれたセーターはべったり

と気持ち悪く裸にまつわりついて、どうしても脱げない。兄貴にひっぱり出してもらってやっと脱出できたものの、セーターのトックリの部分は無残にのびてしまった。

「お前は女だろ。そのくらいのこと出来なくて嫁のもらい手がないぞ」

おこっている兄を父がたしなめた。

「たのんだ方が悪い。自分のことは自分でしなさい。男だから女だから関係ない」

兄はよほどこりたらしく以来女だからなどとはいわなくなりました。

兄は加藤尚文という二・五流の評論家、一流じゃないからけっこう忙しい。しかしどんなに忙しくても家事をやるのが当たり前と思っっているらしい。彼の洗った食器類は何となくうすぎたないし、彼のせいかくつくってくれた料理も、清潔感にとほしい手つきを見ただけで食欲がなくなってしまうのだけれど、私はせめてもの妹ごころで「美味しい」といってやる。「奥さんにやってもらったら？」口まで出かかっているのだけれど、いわない。ウーマンリブを認める以上、家事をやりたいという兄貴のマンリブも認めてやるべきと思うからである。

この兄貴とケンカをすると、本当にケンカらしいケンカ。ケンカのダイゴ味を満きつてできるようなケンカが出来るから面白い。

「何だ。甘ったれたこというな!! お前は昔からバカでオタンチンでオッチョコチョイのヒー



ータンナマズだと思っっていたけど、今でもバカだな。バツカヤロ!!」

電話機がこわれそうな勢いでどなる。私も負けずにとり返してやる。対等の人間として認めているからこそケンカをいどんでくるのだ、その心意気を買ってやるべきであろう。

ところが我が家の実験動物は、そのところがチトちがう。私とケンカをすることを極力さけようとする。勝つ見込みがないからさけるのだと私は勝手に解釈するけれど、私だって時々ソーゼンきわまりないような夫婦ケンカをやってみたい。そこで準備万端おこたりにく土俵を用意するのだけれど彼は決して乗って来ない。まことに始末が悪い。ケンカをしたくないという八方美人的な性格もさることながら、女にゲタをあすけ、女の人をいばらせておいて、すべて押しつけやらせてしまった方が得だと考えているみたい。な、するさも感じられるのである。

## ウーマンリブバァさんの息子

リブバァさんにしごかれて育った昭和ヒトケタだからすごい。努力を惜しまない。根気を惜しまない。甘えを許さない。働くことがよろこびであそびは悪。服でも下着でも新しいものは機嫌が悪く、お古が大好き。食物も中毒の心配さえなければ何でも食べる。

彼は二時間かかって東京へ通勤する遠距離通勤のサラリーマンである。通勤だけで相当疲れはすなのに、朝出勤する前に、時々洗濯をすませていくらしい。らしいというのは、私の方は、彼が朝出かける時、最初結婚した時の約束通り、起きてやらない、朝彼が何をしでかして行くのかわからないからである。

時として彼は私の枕元からかすめとったブラジャーやパンティを洗濯し、実にいいねいに糊をつけて干してしまうから、それを知らずに着た私はブラジャーパンティの形に赤くはれ上る



という悲劇が発生するけれど、洗濯をやりたいという彼のマンリブを認めたいがために、私は涙をのんではれ上ったところに軟膏を塗りたくるのである。

姑は私に掃除洗濯はやらなくてよろしいと云った。私は亡き姑の遺言として、それだけはかたく守りたいと思っている。どういうわけか亭主は掃除と洗濯が大好きで、やるなといってもやってしまう。

二人の義兄も、亭主も、すなわちリブバァさんの息子たちは生れながらにして女をこの世の最大の支配者であり、めったに逆うことの出来ない怪物のような神のような存在と思ひ込んでいた。すべの女が姑のごときスーパーウーマンではないのに女の實力を少々過大評価しているムキがないでもない。亭主は舅に似て無口であり自分のことをしゃべらない。その亭主を誘導尋問してきき出した彼の好きだった女性、今、好きな女性をすらり並べてみてふき出した。住民運動のリーダー格がずらり、勇猛果敢、勇ましい人ばかりなのである。

ウーマンリブバァさんの置土産。被リブジイサンの方は八十才。一切の權威、學歷、男女差別を認めない善良なる市民。その点はいいのであるが、姑の命令通り、半ば機械的に動いていたものらしい。命令の発生源が遠く冥土のかなたに行ってしまった。いかなれば糸のきれたタコ。まわるべき地球をうしなうて宇宙にただ

よっている人工衛星。

姑は彼女なりのウーマンリブは確立したけれど、マンリブは無視した結果、そのお土産を私が背負い込んだことになる。今更くやんでみたところではじまらない。自分で何かを考えること、自分の考えで行動することの習慣を完全にうしなってしまった老人は、人に甘えることだけを知っているゼロ才児で、そのくせ感受性だけは人一倍敏感になってしまっているからどうにもならない。私一人で始末におえなくて専門のつきそいさんをたのんで世話をお願いしているけれど、ちょっと油断するとおもしろしをたり呼吸がおかしくなったり、医者には悪いところはありませんといわれているけれど、私とつきそいさんは一日中、被リブジイさんにひっきりまわされて疲労困憊してしまう。

## プロとしての自覚

姑は私に商売を生きがいにしろといったけれど、もともと生きがいなどというものは人に与えてもらうべきものではない。姑が亡くなり、国勢調査の職業欄に「嫁のカントク」と書いた舅がコウツ化してしまった今、カントク者を失った我が薬局は、片隅に町のミニミニ図書館の子ども文庫など設置して、子どもの本を借りに来るお母さん方がガヤガヤ。土浦の自然を守

る会のたまり兼事務所だから、そちらの人間もウロチョロ。商売のたしにならない人間ばかりが出入りしている。

この間、古くからいた店員に金銭上の、色々な問題が出て来てやめてもらった。舅の看病でいささか疲れていたこともあって、私はこれ以上、商売をつづけなければならぬ必然性を感じなくなってしまった。

「あなたの月給で、何とかやりくりしてみせるわ、商売やめていいでしょう？」

当然、いいよといってくれると思っていた亭主は私にこういった。

「僕の月給にぶらさがるのはごめんだな。月給クビにぶら下げたみたいじゃないさ。サラリーマンになってはしくないって、いつかお前いつてたじゃないか。市民運動に全力投球するならするでお前は薬剤師だろ。プロの薬剤師としての自覚があったら、霞ヶ浦の水質がどうのこうのという前に、お前自身で水をとって来て、BODなりCODなり測定するくらいのことは最低しなくちゃあ。それにはお金がかかるぞ」

プロの職業人としての自覚。それはプロの主婦としての自覚と置きかえてみていいかも知れない。私は亭主にいわれた通り、まさにその点が甘かったことを反省した。

ウーマンリブは女が自分の意志で考え行動することにはかならないと思う。それは人間とし

て全くあたりまえのことなのにちがいない。

人間として当り前のことをする前に、私は老人を手厚く看護しなければならぬ（私がやらなければ結局誰かがやることになる。老人問題は結局歴史のつぐないだと思ふからやらなくてはならない）。プロの職業人としての勉強もしなくてはならない。経済の自立をするための商売もしなくてはならず、母親のひとりとして命を守るために最低必要な市民運動にも参加しなくてはいいけない。彼とどちらが従でどちらが主でもない対等のエロスを享受するための健康も保持しなくてはいいけない——となるとウーマンリブも楽ではない。しかし楽ではないからこそ確立しなくてはならないと思う。

表紙でおなじみ 新進気鋭の画家  
新居田さんが個展を開きます。

ぜひ どうぞ

▼新居田郁夫・展▲ 開催

十二月五日〜十日 早稲田画廊

新宿区西早稲田二一三一 早稲田

奉仕園内 電話二〇三・六〇三九

#### 料理材料ノバ

「日向の国・霜月川食いしん坊」

食欲の出ない夏でもよし、これから寒い季節、暖いお部屋で一杯飲んだ後でもよし——の、宮崎県は代表的家庭料理「冷や汁」をご紹介します。

① アジは腹ワタを出して天火かガスの遠火でじっくり焼き（宮崎県地方では「火ぼかし」と称して魚の保存法にしています）、皮も取った身だけをよくほぐしておきます。二尾が四人前見当。干物や白身を使っても十分美味。

② カツオ節か炒り子で出し汁を作ります。コンブの出し汁にアジの頭と中骨を入れて煮出し汁をとれば本格的。

③ 煎った白ゴマ、ほぐした身、味噌の順にすり鉢でよくすり混ぜ、それをナベブタにのべし焦げるまで焼きます。

④ これをすり鉢にもどして作っておいた出し汁でのばし、普段の味噌汁よりちょっと濃い目の味にします。キュウリの輪切り、シソの葉の千切りを浮かせ、すり鉢ごと冷やせば出来上り。暖いご飯（麦飯ならなお可）にかけて召し上って下さい。素朴な味です。

料理材料ノバ



# 女性解放の歩み

—水田珠枝さんに聞く



(1)

女性解放運動というのは、べつに目新しいものではありません。西欧では十八世紀の末に、フランス革命の影響の一つとして生まれています。人間解放をめざす近代思想の当然の結果といえるでしょうね。

ところがここ数年のウーマンリブの運動は、やはりそれまでの女性解放運動とは性質が違ってきます。

どこが違うかというと、十九世紀から二十世紀にかけての女性解放の運動は、もっぱら同権運動——女性にも男性と同じ政治的・法的権利を与えよ、という運動だったんです。参政権をはじめとして財産権、親権などの民法上の諸権利、あるいは教育の機会均等など、法的、社会的な男女同権の要求ですね。

ところが現在のウーマンリブは、同権運動というよりは、男女の関係そのもの——結婚や、家庭のあり方——を問い直すところとすることが特徴なんです。

もちろんこの動きは、それ以前にもなかったわけではなく、フランスではこの傾向が強かったんですが、現在のような強力なものではあり得なかった。

というのは、この問題のほうが、いっそう解決のむづかしい、根本的な問題だったからなんです。どこが違う、根本的な

かというところ、要するに、労働に裏づけされた女性の経済的自立と、母性としての役割の矛盾をどう解決するかという点についているからなんです。

この矛盾をそのまま制度化し、水続化したものが、家長中心の家族です。ですから家族の問題をさせて女性問題を根本的に解決することはできません。

女性の労働権や、性の自由、母性保護などが、参政権と同じところから要求されていながら、なかなか成果があがらないのは、これらの問題が、家族の根幹にふれているからなんです。

現在のウーマンリブの運動は、これまでの同権運動が見落していた——あるいは成功しなかった、女性解放の問題をクロージアップしたものとして、高く評価されるべきでしょうね。

(2)

アメリカでは、第二次大戦後、どっと復員してきた男たちに職場をあけわたすために女性には家庭に帰れ、ということがしきりに叫ばれはじめた。

よき妻、よき母として生きることが義務であり、男に愛される女らしさこそ、女性最大の幸福であり、美德であると強調されるようになったんです。

企業の側では、女性を消費者として家庭に閉じこめ、家具を

ドレスを、毛皮を、車をと、ありとあらゆる商品売りつける対象にし、一方、人手の足りないときは、いつでもクビに出来る安価な労働力として主婦を利用する……。

いま、全米一のウーマンリブの組織、NOWの会長をしているベティ・フリーダンが一九六三年に出版した「女らしさの神秘」(邦訳・新しい女性の創造・大和書房)は、このへんの状況をよく描き切っています。

真に人間として自立できる社会的労働からは遠ざけられ、主婦という美名の下に家庭に閉じこめられ、一人の男性に従属する空しさ——その生活の意味を問い直し、女らしさの正体を見極めようというところから、アメリカのリブは始まった。

日本の状況も非常にアメリカに似ていますね。

しかしアメリカではもうひとつ、政府サイドから、男女差別をなくそうとする動きが、フリーダンなどのウーマンリブ運動がはじまる前に、既に存在しています。

重要さにおいて日本の憲法にも匹敵するアメリカの市民権法。これに基づいて、ケネディ大統領の在任中に、「性差別に関する委員会」というのができた。

この委員会が性差別に関する実態調査をしたら、出るわ出るわ、すごい差別の実状が、ボロボロ出て来たんです。

これはとんでもないことだ、ということとで、政府がまず、行政機関の中から、差別をなくさなければ、と努力しはじめた。

このへん、日本のお役所とはまったく違うんですね。政府がデモクラシーを守るために、イニシアティヴを取る姿勢がある。やはり大したものですよ。

こうして、アメリカで起こったウーマンリブの波が、全世界に拡がっていったわけですね。

(3)

四、五年前、イギリスに行ったとき、婦選運動生き残りの女性の一人に逢う機会がありましたね。今ではもう八十才すぎのおばあさん。サフラジェット(婦選運動家)であった以外は、ごくふつうの、どちらかというと保守的なひとでした。

この人が、一九〇五年の、自由党の大会に出席していたというんです。そのとき、会の最中に、クリスタベル・パンクハースト——婦選運動を推進した有名なパンクハースト家の一人ですが——が立ちあがって、質問した。

そして大会の議事妨害だ、攪乱だということで逮捕されてしまったんです。

ところがね、私の会ったこのおばあさん——当時はもちろんうら若い女性で、公務員だったそうですが——は、「妨害なんてとんでもない。あれほどポライト(丁寧)な質問はなかった。自分はその大会に出席して、彼女の質問の様子をこの眼で見、この耳で聞いたから断言できる」と云うんですね。

ところが当時の男性ジャーナリズムは、過激なサフラジェットが大会で議事を攪乱した、というふうには報道している。今も昔も、女に対するこんな扱いは共通していますね。

ただイギリスの婦選運動は、たしかに過激な方法もとっています。放火、投石、刑務所でのハンストなどで、世間の関心をひこうとした。

この戦術は結果的には成功したといえます。婦人参政権に対する一般の関心をたかめ、世論もだんだん同情的になってきましたから。この戦術に反対をした婦選運動のグループも、後には、さまざまな戦術をとった女性がいいたからこそ婦選を獲得することができたのだと、評価するようになりました。

私たちが現在享受している参政権は、こういういろいろな女のひとたちの運動のおかげで手に入ったものなんです。

(4)

古典的な社会主義の考えを持っている人の中には、社会主義になって人民が解放されれば女性も解放される、ウーマンリブよりもまず社会主義を実現するほうが先、と単純に考えているひとがあります。

もちろん資本主義の国より社会主義国のほうが、女性解放されていると云えるでしょう。女性の社会的進出の度が大きく、生産労働に直接関わっていますから。

それでも、社会主義すなわち女性の解放というわけにはいかない。

家事、育児を、誰がどう処理するか。これまでのように女性のほうにもっぱら負担がかかっていけば、社会主義であろうがなかろうが、生産活動において男性が優位を占めるのは当然。男性は女性よりフルに生産活動に没頭できますからね。そこで男女の間に差別ができる。

これでは社会的労働と、母性との矛盾は、やはり解決できない。家庭内での性的分業が続くかぎり、男女の差別は解決できない問題なんです。

資本主義の中では、この問題の解決は尚更むづかしい。利潤の追求を第一原理とする資本主義社会では、母性は生産の中でつねにマイナス要因としてとらえられていますから。

ヨーロッパでは、労働者による生産の管理——自主管理——が注目を集めています。こうした方向に、解決のいとぐちを探ることができるのではないだろうか。

労働と休息、こともと過ごす時間、文化活動、食事の支度な

ど、人間の生活のすべてを、どのように組みあわせ、どのようにバランスのとれたものにしていくか。これは男性の解放にもつながる問題なんです。

(5)

五、六年前、あるところで講演をしましてね。その時「女が家事をして男が外で働く」ということは、おかしいんじゃないか、今に変わるかもしれない」といったら聴衆が爆笑しました。

思いもよらないことを云われたおかしさで、笑ったんですね。ところがここ二、三年、同じことを云っても、もう誰も笑わなくなりました。男女の役割分担の意識が、もう以前のように固定化したものではなくってきています。

笑う聴衆から、笑わない聴衆になった当人たちは、その変化をおそらく自覚してはいないでしょう。婦選運動も、昔は笑われたものです。「女だてらに」と罵られたものです。

今、そんなことを笑う人は、誰一人、いませんね。「女だてらに投票なんかして」と云ったら反って笑われるでしょう。

現在のウーマンリブがめざしている、性的分業にもとづく家庭と社会のありかたの変革、男女の役割分担についての固定観念の打破も、意外に早く実現するかもしれません。

ついこの間あった、「男が命をかける司法界に、女の進出を許したまるか」なんていう発言も、一寸前だったら、ごく当然の発言としてうけとめる人が多かったんじゃないでしょうか。

女はこれまで、バカだ、無能だといわれても、別に怒りもせず、自分でも、女はバカだから、ですましていた。

今は理由もなくそんなこといわれて黙ってはいませんね。怒るのが当然です。女はこれから、自分の怒りを、もっともっと大切にしなければね。

(市野学園短期大学教授)

(談・まとめ田中)

## 差別裁判の現実

駒野陽子

未婚の母には、自分で生んだ子どもを育てる権利がない。

働く母は昼間家にいないから、子どものためにならない。

裁判所がこう云って、あなたから子どもを取りあげたら、あなたはもうするだろう!?

信じられないことだが、四年前大阪で起こった「K子さん裁判」は、実際にこうした判決のもとに、K子さんからその子を奪ったのである。

幼稚園の先生をしていたK子さんは、園児の父Nと性関係を持ち、妊娠してしまう。出産後、NはK子さんから、暴力で子どもを奪いとり、知人のS夫婦の実子として入籍させる。

K子さんは子どもを取り戻すために、法廷で争い、そして担当の竹内裁判長は、右のような判決を下したのである。

私たちと同じく、素朴に、法の正義を信じていた彼女が見たものは、法も男社会の規範に従って運用されており、未婚の母、働く母

の権利は守ってはくれないという、怖ろしい現実だった。

K子さん事件を、一挙に女たち全体の問題としたのは、まず第一に朝日新聞の記者松井やよりさんの力による。男性ジャーナリズムが無視したこの事件をあえてとりあげた彼女の記事は大きな波紋を拡げた。各地にK子さん支援のグループが生まれ、東京でも、「働く母・未婚の母の差別裁判に抗議する会」が結成された。

千人に近い女たちが参加した。未婚の母の権利を守ろうとするリブの女たち、母親の立場から素朴に同情する主婦たち、働く母を守ろうとする、労働組合の女たち……

婦人問題に以前から関心は持っていたが、直接ウーマン・リブ的な運動に関わりを持った経験がない私は、この事件ではじめてリブの女たちと共に、行動することになった。

——誰かがやらなくてはならないのなら、自分がやろう。無名性に埋没することの自己満足を、打ちやぶろう。婚姻の問題でタブーの多い教職についているだけに、尚更のこと……

こんな気持で、会の連絡場所に自宅を提供することになったのである。

K子さんが判決にそむいて、実力で養い親から子どもを取りもどした時、彼女を支援していた大阪の運動体は、組織的なまとまりを

失い、少数の彼女に身近かな教師の仲間、リブ的なグループが残った。私たちの会にも動揺はあったが、男社会の論理の理不尽さと最後まで闘おうという決意が運動を支えた。

K子さんとかどもの隠れ家の提供。K子さんが留守の時のベビーシッター。小児科医の手配。保育所さがし。時には自宅に親子をかくまうなど、家族まで巻きこんでの活動の日夜だった。

いま、K子さんは天下晴れて、親子水入らずでくらしている。

法の裁定に逆らって、隠れ家を転々とする生活に耐えられなくなった彼女は、二百万円の慰籍料で和解に応じ、ようやく子どもを自らの手にとりもどしたのである。当り前のことを望んだだけの彼女の物心両面の犠牲の大きき。

K子さんの事件はど、現実の法が、裁判が、社会通念を守る為に機能していること、それに逆う女に対しては、男社会の冷酷さをむきだしにして弾圧にかかる現実を教えてくれたものはない。そして又、困難な闘いを通じて連帯したリブの女たちのひたむきさ、やさしさ。この運動は、私に実に多くのものを学ばせてくれた。(牛込一中教諭・三児の母)

(詳細な資料は渋谷区代々木一ノ四九ノ六 駒野方にあります。送料共三七〇円)

# 「自立の家」の女たち

野中郁子

今三人の子どもとともに母子寮に住んで保育園の保母として働くAさん。三九才結婚十四年。着のみのまま夫の暴力をのがれてリブセンターにかけこんで来たのは二年前の真冬の夜。メンバーが借りていたアパートの一室で夫の目をのがれての生活がはじまった。その後都の一時収容施設に入り、今の母子寮に入るまで、子ども達は夫にみつかるのをおそれて一学期学校にも行けなかった。

女が自分の力で生きていこうというのに、なぜ逃げかくれしなればならないのか。生命が危険にさらされているというのに行政の福祉の壁は閉ざされたまま。

これはAさんだけの問題ではなく、すべての女の自立にかかわる問題だ。そして、「自立の家」がスタートした。

大阪から神戸から子供をつれた女たちがやって来た。朝から酒をのんで働かない亭主。ささいなことにも逆上して子どもにまで暴力をふるう夫。

充分な資金の準備もなく、ささやかな2DKのアパートではじまった「自立の家」は、

たちまち定員オーバー。女と子供のこった煮よろしく活気あふれる空間ができた。いつも男の目を気にして小さくなっていった人も、お互いに「自分」を話し出すうちにいつしか声も大きくなっていった。生活費はすべて割り勘。金のない人は出世払い。家庭裁判所に離婚の手続きをとる一方で、お互いの子どもを交替でみながら、バイトに出かけて資金かせぎ。しかし保母や看護婦といった資格をもっている人はともかく、就職はきびしく、子どもとともに切り開くべき自立の道はけわしい。自分にも甘えることはできない。今度こそは、自分にとって自分だけが「御主人様」なんだ。この感慨こそ結婚行進曲ならぬ離婚行進曲なんだ。

X

「そんなひどい男とくらべたら、私の亭主はまだましな方なんだわ」とあなたは胸をなでおろすだろうか。私にはできない。なでおろそうとしてもおさまらぬ胸の奥にうずくもの、それが主婦である私が「自立の家」に心をよせるキッカケになった。

X

今日も帰りのおそい夫を待って、先に食事しようか、フロにしようか。子どもは一度かたづけたおもちゃをまたちらかしてしまふ。いらいらしながら、「ああ私だって、たまには友人と語らいつながら食事をしたい。映画もみたい、音楽会にも行きたいのに」疲れて帰

る夫のために「ああうまかった」の一言をいってもらうために、映画をみなくても、音楽会に行かなくても別にどうってこともない……。その分夫にやさしくすれば……。いつの間にか私の「見たい、聞きたい、話したい」は、音もなく落ちこぼれてきた結婚以来の何年間か。その落ちこぼれたものをこそ、今、狂おしくいとおしい。それは私の魂なのだから。あたりの悪い亭主をもった女の涙をみて自分の胸をなでおろすことなど到底できない。

生活のためという大義名分に支えられて働く男にとって、家庭での夕食こそは、自分をとりとどす時間であり、それは夕食を用意して待つ女によって保障されているというしくみの中で、私の「見たい、聞きたい、話したい」は「夫の理解」というおなきけによってしか与えられることがない。権利などでは決していない。

友だちのアパートをたずねた。二人の子供をつれて「自立の家」に家出して来て一年。ようやく離婚も成立して老人ホームに看護婦として働いている。隅から隅まで誰かの目を気にしなくてもいい彼女の部屋は、何と気持がいいのだろう。「やはりきびしかった」と彼女は話すが、自分自身の決定権を自分のものとしてたくましく生きる彼女の顔は、私には美しくまぶしくみえた。(りぶ新宿センター)。

## 「子どもが二人」と解雇 働く権利を守る闘争中

梅津佳津美さん

中馬ハツ子さん

梅津さんは十三年、中馬さんは十四年、コパルという会社で働いてきました。ところが二年前、「二人子どもを持っている既婚婦人は解雇する」と、解雇されてしまいました。しかも組合までそれを認めていたのです。組合は、一人だけの子持ちまで切ると、人数が多い。だから二人以上の子持ちだけなら……とその線で会社と合意し、手を打ったのでした。

梅津さんと中馬さんは、一人めの子どもを生んだときも、すいぶんいやがらせ（職場をかえられるなど）をされたうえ二人めで解雇とはあんまりではないかと、裁判に訴えることにしました。五十年九月、東京地裁はこの解雇は憲法十四条、労基法三、四条に違反するから、無効であると判決を下しましたが、会社は上訴しています。

お二人をたずねてお話をうかがいました。梅津「裁判で課長が、子持ちは出勤率がわるいと証言しましたが、産前・産後の休暇も

欠勤扱いですし、労基法で育児時間というのが認められています。それも遅刻・早退扱いで、三回とれば一日欠勤とかぞえるのです。あんなふうにかぞえられては、一カ月ちゃんと全部出ているのに、十四日も休んだことになっちゃう」

中馬「労働基準監督所にもいきましたけど、冷たかったですね。退職金もらえばいいじゃないかみたいな言い方で……。でも、わたしは解雇されたとき、ちょうど主人が病気で……；それまでも二人合わせてようやく暮すという生活でしたから、ここでやめさせられたらたいへんなことになると思い、すいぶん事情を訴えたんですが、退職金は給料一年分くらいあるんだから、というんですね」

梅津「給料じたいは少いんです（廿年勤続で十一万円ほど）。パートと違いますね。会社はその点でももうかってるし、これ以上下けられないので、母性保護の権利とか、そういうものを切ろうとするんです」

最初、既婚婦人全員を対象に希望退職をつのったんですが、思うほどみながやめないうんですから、子持ちを切ったんですね。

裁判は現在進行中で、わたしたちはまだ職場へ帰れずにいるんですが、裁判なんかになったせいでしょ。か、会社では今二人めの子どもを生もうとしているひともいるんですよ。そういうふうな、これから権利が守られるよう

になれば、わたしたちの苦勞もむくわれると思ってる……」

お二人の勤務していたコパルという会社は、資本金十四億、本社だけでも社員千二百人という、すいぶん大きな会社です。吹けば飛ぶような中小企業というわけではありません。そういうところでも、ギリギリ合法の線で労基法の抜け穴をみつけ、女であること、母であることを理由に、低賃金や解雇を押しつけてくるのです。

「旦那がいるんだから、食えるだろう」会社側はそういったそうですが、女が主婦として位置づけられているのは、安く使って解雇しやすくしておくため、ではないでしょうか。

お二人の例でもわかるように、当然労働者を守るべき組合が、ここの女の問題になると、まるで経営者側のように、冷たいあしらいをすることが多いのです。

組合に婦人部があるところも多いのですが、それも効果的に活動をしているとはいえませんが。

ご自分のことは諦めても、あとにつづく女性のために、と頑張っていられる梅津さん、中馬さんは、ウーマンリブを実践していられる第一線の働き手ではないでしょうか。

（まとめ・和田）



## 私にとってのリブ

斎藤千代

先ごろある雑誌でリブ特集が取上げられた。その合評会で九つのリブグループを選んだ理由が問われ、何をもってリブとするか、編集委員から各人各様の答が返ってきた。

「あくまでも女のサイドに立って考えること」「新しい生き方を模索すること」「因襲を捨てる」などの答の中で、私が一番共感したのは、「何かわからない。だから模索を続けること」という発言だった。

その雑誌の特集に、例えば私の属する「あごら」は、はじめから声がかからなかった。リブと目されて呼びかけられた中ピ連は「私たちはリブじゃない、女革命だ」と申し出を蹴ったという。もしも「あごら」が呼びかけられたとしたら、私たちは多分応じただろう。いわゆるリブを自任する人々に「仲間じゃない」と思われているにしても、へ闇の向こうに何かを求めていつも手さぐりしている、という意味では、正しくリブだと、私たちは、——少なくとも私は——思っている。

X 「あごら」という雑誌をつくって四年、職業

と女を結ぶ「BOC」という団体と呼ばれて十三年たった。その間に、私自身はすいぶん変わったような気がする。女だからという理由で職がない、女だからといって賃金が半分、女だから家事をなおざりにして働くことが罪悪視される、そんな理不尽さを考えてみようと、BOCを呼びかけながら、十三年前の私には、「すべての女が職を持つこと以外に差別解消の方法はない」という信念はなかった。より生き生きと生きることと働くこととの関連をばく然と想ってはいいたが、自分自身をさえ説得できない面があった。仕事と家庭の両立を願い、そのどちらも中途半端になっている八つ裂きのような苦しみの中で、せめて止まっていまい、歩きながら考えようと思っただけであって、それは、あいまいであると同時に、意気込みがあり、肩に力が入りすぎていたように思う。

自分が変わった、と書いたが、少なくとも十三年前に比べれば自分にはあいまいさが少なくなり、同時に意気込みも少なくなったような気がする。そしてそれがリブだったのではないかと、このごろ初めてのように思っている。

X ひとつとはなしに自殺志願にとりつかれて、払っても払っても追いかける自己嫌悪とたたかいながら、心の底では自分をもっと明るく

照らしたかった。(己れを切り裂く刃は、いつも両刃の刃であり、切り裂く力が強ければ強いほど、それはまわりの人々を傷つけ、いっそう自己嫌悪を深くした)立ちどまって考える時間が恐ろしく、やみくもに働いた。そして働き疲れ、傷つき果てたのちに、目からウロコが落ちるように、やっとまわりのものが見えはじめた気がする。

己れを変えたり人を変えたりすることではなく、自分をふくらませ、ふくらませた自分によって自分を照らし、その照らす明るさが、やがてはまわりも明るくするのだということに気がついたとき、私は人生の折返し点をはるかに過ぎていた。

連帯とは手をさしのべあうことではなく、一人一人が大きくなることだと思う。一人一人が大きくなれば、隣の一人との距離は近づく。こんな自明のことを悟らせてくれたのは、「あごら」のリブの仲間であった。

十三年の間に実に色いろなことがあったが「あごら」という雑誌をつくる過程の中で、自分の曖昧さをつつずり払い、支え合い、愛し合う仲間と巡り合えたことを幸せに思っている。余分のものを振り捨てて一つずつつきとおり、一つずつ豊かになる生き方を、私は私なりにヘリプンと叫んでいきたい。

あごらII婦人問題専門誌。季刊。発行所BOC  
出版部 東京都新宿区新宿一ノ九ノ六(あごら)



# 主婦が抱く ウーマン・リブへの疑問

## —吉武輝子さんを囲んで—

小倉 徳子  
辻浦知津代  
荒木 弘子  
林 慶子

わたしは「普通」

あなたは「特別」



小倉 新聞などで見るウーマンリブの運動って、女全体に着目しているようには思えないんですけど。女が外に出た時の立場、男との平等を主張するだけの運動に思えるんです。

吉武 まず最初に、世の中を考えて行く上の元になる情報、つまりマスコミのことを考えてみたいですね。

マスコミ社会の99%は男の人、完全に男性社会なんです。女性ジャーナリズムは先進国の中では最低なのよ。

その上男は外、女は家庭と云う意識が大事に守られている社会だから、女と云うと家庭担当。政治欄、社会欄なんて男ばかり。

だから例えば、国際婦人年の記事にしても家庭欄に出る時は、耐えに耐え、つき上げる思いを伝達しようという意志があるから、読んでいて納得できる。それが社会欄となると、女はこんなものだ、と云うヤユの記事になってしまうのね。

週間朝日に婦人年の特集があったけど、そのタイトルは「女は男の何なのさ」。(笑い)しかも、男性有名評論家が『結局、男女平等とか、国際婦人年に参加する女は、出もど

か、行きおくれ』だなんて言う。こんなこと男が言う分なら長年のことから、またかって感じだけど、怖いのは、それに女が同調することね。

「私は結婚してるし、あの人は特別だ」つまり男の人たちは、本国と植民地みたいな関係で、女たちを分断し、連帯させず、の関係に置くのね。

市川房枝さんや手塚らいてうさん達が、女性も人間だと宣言したあの時代と、男の反応は今もちょっと変わってない。

「あれは特別、あなたは普通のいい女でしょ」と云うふうに切ってゆく。

男性中心社会のマスコミが取り上げる女性運動は、ニュースとして面白い風俗的な扱いだけで、地道な活動なんて取り上げない。

男性ジャーナリズムだけでは駄目なんですよ。物事は両面から見なければ分らないもの。辻浦 リブと言えは中ピ連という感じで、女性解放とか男女同権とかが、私たち主婦とは別の場所動いているように思っていました。

男と女がもっと

仲良くなるために



吉武 同権主義と女性解放の違いをこの際キチッと押さえておきたいわね。

明治三十三年に施行された民法は、ビスマルク憲法と、女性にとつての暗黒時代だった江戸時代の武家社会のしきたりを取り入れて作られている。

この中で女は、禁治産者、身障者、子どもと並んで「半人前規定」されているの。つまり「女は夫に保護され養われて家庭の中で生きるべきものである」。

社会的には全く認められなかった半人前の女からすれば、人格を認められている男に近付きたい。ですから「せめてなりたや男の八分」と云う発想で、同権運動が起ったわけ。

ところが女が近付きたいと思ってきた男が一家を養うことで疲れ果てていること、人間らしく生きることの選択の自由さえないことを知って愕然としたのね。

何のことはない、生活者としては疎外されてしまっている男の現実を見て、自分の命は自分で賄なう生活者としての自立の大切さがわかってきた。

男は外、女は家庭という性的分業のなかで、役割人間としての付き合いになった男と女の関係は、セックスさえ事務的になっているものね。

男も女も「生活の自立」「経済の自立」「精神の自立」「性の自立」この四本の柱を打ち建てながら、もっと仲よくやさしい関係をとりもどし、自由に人間らしく生きて行こうよ

って言うのが「ウイミンズリブ」なんです。小倉 私はウーマンリブってもっと闘争的なものだと思ってたわ。

辻浦 「仲よくしようよ」を具体的に言うのと、今まで男の仕事、女の仕事と分けていたのをどちらでもやれる方がやろうと言う事でしょいか？

でもその中で、男でなければ出来ないもの女でなければ、と言うものがあると思うのですけど……

吉武 ないですね。あるのは「産む」だけね。母性と云うものが「産み育てる」と変わって来たのは私有財産が発達してからなのよ。

荒木 母性が産むだけとしたら、育てるのはどこでやればいいのでしょうか？

吉武 そこに選択の自由があつていい。夫婦で育ててもいいし、スウェーデンのように母性保護でなく両親保障という型だね。

保育休暇は夫がとっても、妻がとってもいい……。

小倉 でも私は、育児はやっぱ家にいる人に向いていると思うわ。

吉武 家について、誰がいの？

小倉 誰って、どっちでもいいけれど……。とにかく「家にいる人」が絶対的前提だと思わ。

吉武 その考えが怖い。それじゃ家に居られない人はどうなるの？

小倉 自分をもっと生かすために働くのはいいいけれど、より経済的な安易さを求めるために両方とも外に出るという型には賛成できないのですけど……。

吉武 子どもが育つには父親も母親も老人も全部必要なのよ。それを男はあっち、女はこっちで分けてしまうから暮らしにくくなるのよ。

林 こんなに女だけが育児にたずさわっている国は世界でも珍しいんじゃないでしょうか。男は生活者として育てられてないから、外国の男と比較すると驚くほど感性が貧しいように思えますね。

#### 男も女も半人前



吉武 つまり感性と理性、両方備えているのが人間。生産者であって消費者、強さがあってやさしさがある、って云うように……。

だけど日本は女は感性、男は理性とか、女が消費者、男は生産者、女は子育て、男は稼ぐとか、本来、人間に一つになってあるべきものが引き裂かれているのね。

性別分業制度、役割として生きることが固定化された結果、みんな駄目になっちゃっているの。

荒木 そう云う中で高校の家庭科男女共修は切実に必要を感じますね。

辻浦 選択になったんですか？

林 いいえ。結局現行通り「女子のみ必修」になりそうですな。

政府が出した「今後の婦人のための十年の目標」の中で、伝統的な男女の役割分業意識の見直しが大きく取り上げられていると云うのに……まさに、逆行ですよ。

#### ウィミズリブ

#### は平凡思考



辻浦 夫は亭主関白志向。私も家庭の中だけで終るつもりでしたが、ある事情から動かねばならなくなって……

育児に家事に仕事、そうやって次第に夫の態度が変わってきました。私が急ぎの仕事をやっていけば、家の中のことしてくれるようになりましたね。口で闘争するよりも自然に分ってくれて、私も働いてよかったなって思ってるんです。

吉武 自分がやり続けている中に生活するのは変わらざるを得ない。まず、やり始めることが大切ね。だけどそれだけではダメですよ。例えば、なぜ日本の女は二十四、五才で80%も結婚になだれこんで行くのか、なぜ男と

女が97%も結婚してしまうのだろうか？

つきつめて行くと結婚したくてしているのではなく余儀なくさせられて行っている現状が見えてきますよ。

一方では二十四、五才の若年停年制があったり、二十五才を過ぎると男の給料との間が二倍にひらき、三十才を過ぎると三倍にひらく。

つまり今の日本の資本の論理は、女は養ってもらふものだから安い給料でいいんだ、って言い続けたいわけね。

このシステムを変えない限り、家庭の中だけで変って来ても限界があるのよ。

小倉 理論ではリブのこと分ったような気がするけど、それでは現実には自分に今何が出来るかと云うと、そういう意識を持って子供を育てることしかないんじゃないでしょうか？

吉武 ただね、日本の母親って子どもべったりで自立してないですよ。

母性は神聖とか、良妻賢母よ、とか母親であることを賛美されながら、その母親たちが唯々諸々と、どれだけ沢山の子ども達を戦場で殺してしまっただか……つまり世間から見ても、いいお母さんとか、いい妻だとか作られた像にがんじがらめになっているだけだね。小倉 そこから脱皮して行くことが母親の課題だと思うけど……でも私は平凡だから……。

吉武 よく「私は平凡な主婦だから」と言う人

がいるけど、平凡って云うことの意味考えてみたことあるかしら？

平凡って、戦争で死んでもならないし、公害で死んでもならない、みんな平和に生きてゆこうじゃないか、そして最後は昼の上でやすらかに死ぬると云うことね。

そのことを駄目にするものが出来た時、それを壊そうとするものが現われた時は「戦うんだ！」と云うことが平凡に生きるってことを宣言することなのよ。

平凡と云うことを「何もしない」というふうに考えることは間違いなの。ウィメンズリブは平凡思考なのよ。

## 言葉は

意識を表わす



荒木 リブの人たちは、差別語をすいぶん問題にしているようですが……。

小倉 言葉なんてどうでもいいと思うんですけど。内容さえちゃんとしてれば……例えば私、「主人」って言うのなんかも全然抵抗ないんです。

林 私は二十数年前に結婚した時からずっと、「主人」って言葉はどうしても使えない。

辻浦 本当に御主人様って気持ちじゃなく、ただ慣れてカッコいいから使ってるんじゃないで

すか？

吉武 それがとっても怖いのはね、言葉って記号じゃない、やっぱり意識を表わしている。

だから、それにたいめらいを感じる意識ってものが、少しずつ社会を変える力になって行く。言葉の問題は、根が深いですよ。

林 近世になって、儒教思想から「夫を主人と  
思って敬い慎みて仕うべし」ってことになっ  
たけど、これも武家階級だけのことで、庶民の  
夫婦は「連れ合い」と呼び合っている。

妻が夫を「主人」と呼ぶようになったのは  
近代の良妻賢母教育に入ってからじゃないか  
しら。昔はなかった言葉なんですよ。

古代では夫婦は互に「ツマ」と呼び合っ  
ていた。着物のすその褌、一對のものを云う意  
味ね、この言葉からは本当の夫婦の愛情と、  
平等が感じられるわね。

やさしさとは

想像力



吉武 近代になり産業構造は進歩したけど、精  
神構造は、とくに男と女の関係は身分社会だ  
った。生れによって人間の価値の上下をつけ  
る社会ね。男だからえらくて、女だから劣っ  
ているって言う社会。

敗戦で憲法が変わっても、内にもって育って

しまった意識はなかなか変わらない。

今でも家父長制度、身分社会をひきずって  
いるのね。

そんな中で、自分が今やっていること、世  
間で言っていることに何んでも注意深く疑い  
の目をもたなくては……。

小倉 でも差別って、働いて給料なり待遇なり  
で身にしみて感じないと分らないみたい。今、  
暮らしていて分らないんです。

吉武 居心地がいいからよ。

その居心地のよさは、わずかに夫の指一本  
で支えられているものなのね。一見居心地  
がいいようでも実は真の人権が守られてない、  
ということに気付かない限り、居心地のよさ  
を感じてる人に分らせるのは無理ね。

差別とは「感じる」問題なもの。

こわいことは、自分が差別されていること  
を感じない人は、自分が人を差別しているこ  
とも分らなくなる。

林 それを痛感することが多いですね。

吉武 自分が生きている中で条件が整っている  
人に、そのことを前提として物事を考えられ  
たらたまらない。若し自分がそうだったら、  
と他の人のいたみが感じられる人でなくては  
ね。

やさしさとは想像力だもの。

小倉 まず主婦の意識改革をしなくてはいいけ  
ないみたいです。

林 意識改革も必要だけれど、毎日の生活が変わっていかねばね……。

辻浦 そうですね。私、意識では、男の子にも家庭料必修を望みながら、日常は、どうしても「台所は私のお城」って感じなの……。

息子には母親が忙しかったら自然に手伝ってくれる思いやりのある子に育てて来たつもりなのに、中学になった頃から「女なんて」と言い出して……。

### 男が命を

かけるとき



荒木 私は百男夫にオンブしている。働かないで食べさせてもらっているからいつも負目みたいなのを感じちゃうんです。

小倉 今の社会で女が家に居ることをよくないなんて、おかしいと思うの。いつの世の中になってもその型は残っていると思う。ただ女が働くとき、足を引っ張る社会はおかしいけれど……。

荒木 女が家に居ることが、働く女の足を引っ張ることになるって思いませんか？

小倉 そんな被害妄想になることないと思うわ。吉武 個人的にはなく、システムとして足を引っ張っていないか、と考えてみたらどうかしら。

女は夫の給料で食べていくもんだ、と云うシステムをなぜ守りたいのか……。

よく家事労働の社会的評価や経済的評価がないから女の給料が安いんだ、と言う人がいるけど、そうじゃない。

男の給料で食べていくのが当り前の女で、それをやらない女は特別なんだ、と言うシステム。その構造を専業主婦が支えているってことね。

小倉 でも私は家庭を守るのが体質に合っているの。家にボサッと居るわけじゃなくて、思うような家庭を作りたいと精一杯努力しているんですよ。

吉武 体質に合っていると言うけど、それも分業文化の中で作られたものじゃないかしら？育てられて行く過程で、男だから、女だから、と作られてゆく。男は職業人に、女は家庭の主婦になるために……。

林 そちらからも、例の司法研修所の裁判官たちの差別発言も生じて来るわけね。

小倉 それ鬼頭判事のこと？

荒木 ちがう。「男が命をかける司法界に女の進出を許してなるものか」って言った裁判官がいるの。そんな人に裁かれたらたまらない。って今、「国際婦人年をきっかけに行動を起こす女たちの会」などが、罷免を要求するため訴追請求の運動をしているのよ。

林 「女は家庭に入るべき」と一人の男が一人

の女に言うのは勝手だけれど、こんな戦前の信念をもっている裁判官に裁かれていると思うとおそろしいわね。

吉武 女性の人権をふみにじっていることを理解しない裁判官に女性を裁く資格はない。憲法違反的体質と云う点では鬼頭も根は同じですよ。

林 あげ足はとりたくないけど「男が命をかける」ってことは鬼頭さんみたいなこと？って言いたくなる。

吉武 私、男が命をかけるってこと信じない。だからいつもヨセヨセって言うの。(笑い)大体どこの亭主も丸紅の大久保・伊藤よ。

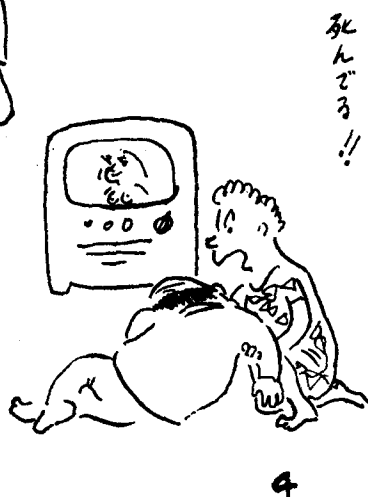
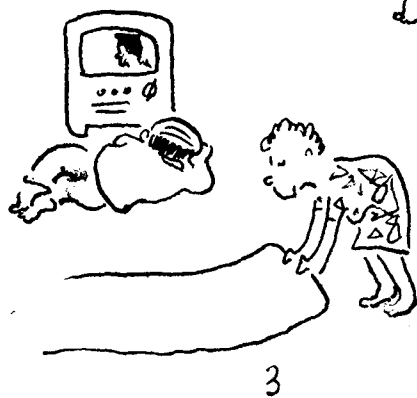
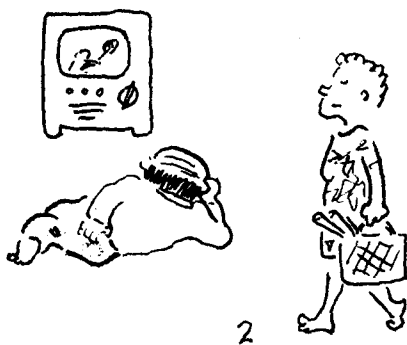
林 だから主婦の中からも「運が悪かったのね。お気の毒」っていう声が生まれる。

荒木 その上、「あそこまで徹して立派だ」とも……。

林 愛社精神と言ったってかつての忠君愛国の精神構造とすり変っただけなのにね。

吉武 おまけに、その大義名分が「妻子を養っているから」……。

言い代えれば、性的分業制度が男にも女にも固定化しているからよ。だから日本がこんな急速に大公害国になってしまったわけね。奥さんの方も消費者運動などやりながら、一方で「一所懸命やって来てね」って夫を送り出すんだから……。



画・西田 淑子

## 愛していることの実体



小倉 私の主人はとても理解があるの。私のやりたいことの足を決して引っ張らないし、どんなことでも応援してくれるし……。

吉武 それは観音様の手のひらに居るようなものよ。「自由にさせておく、ただし俺の居ない間にやれ」

たから婦人学級なんかみんな走るようにして昼間出て来る。観音様の手のひらの上のものはいつでも払い落すことが出来るわね。落された妻の座のみじめさは大変なものですよ。

荒木 主婦の幸せは、不幸と背中合せの部分があるけれど、それが自分の身には絶対来ないだろうと言う安心感があるのね。

林 人間性の欠如と云うか、エゴの塊りみたいなものを感じますね。

吉武 日本の結婚はお金が入入している。つまり夫が経済の柱。身の上相談なんかやっていると、女が一番そこでダメになっているのがよく分るわね。

蹴とばされても何をされても「愛してる」って云うの。自分の心をじっとみつめてみるとそれは結局「食って行けない」ってことなのよ。男と女の役割分担の実体を「愛してる」

って言う言葉でまぶしちゃう。流行歌で一杯使ってるような言葉でまぶしちゃうから実体が見えなくなってしまう。

## 本当の

やさしさとは



荒木 今、職場での女の差別の一つにお茶くみ問題がありますね。あれは、やさしさみたいなものを男が求めているのではないかしら。

小倉 お茶くみぐらい誰がやってもいいと思うけれど……。

林 「たかがお茶くみぐらい、男女平等のはきちがえ」って言う人が多いわね。「たかが」なら何故自分でしないのか。男がやらない、女がやる、その根は何なのか。

吉武 「お茶くみ」は女を安く使うこと、女はやっぱり家庭に入るんだよ、と言うことを象徴している問題ね。

いつでも、うちのカアちゃんと云う発想でしか女を見ない、女を自分と同じ労働者と思っていない。

例えば去年一年で主婦のパートは三分の二、くびになっている。経営者は、「家に帰れば養ってもらっているからいいじゃないか」——労働組合に相談に行くと、労組の執行部も、「お父ちゃんなくくびになっただけであるまい

し」——。(笑)

辻浦 私の会社は自動お茶くみ器があるのに、三時になると女の子がいて運んでいる。

やっぱりやりたいんですね。

吉武 やりたいんじゃないの。無意識の恐怖感を持っているのよ。女の心理に深く根ざしているものを見てゆかないと……女のやさしさなんて思いこんでいるけど、実はそうじゃない。二十五才過ぎるとオバちゃんと呼ばれ、十年も仕事やっていると片隅に追われるのが大方の女の職場ですよ。男側は結婚するなら二十四、五才でやさしい女、つくしてくれる女を要求する。一人で生きて行かないような仕組になっているから、どこかで決着をつけて結婚しなければならぬ、とすれば力のある方に合わせるより仕方がない。職場でも男の人の意向に沿って生きる部分がどうしても出る。媚びの文化ですよ。

辻浦 それじゃ、女のサービス精神とか、してあげたいという気持は？

吉武 人間のやさしさってとても必要。だからこそ、女が保身のテクニクとして、やさしさをそんな風にご利用しないですむ社会の中でなければ、本当のやさしさは生れないでしょ。人間同士、本当のやさしい関係が欲しいですね。

今のままでは、男も女も人間としての本当のやさしさは持てないのよ。



私たちに

出来ることは



荒木 リブの本当の姿、意味をもっといろいろな人に分って欲しい。人間のためのウィメンズリブだと云うことがどうしたら分るのかしら？

吉武 ちょっと前まではね、性的分業制度撤廃だなんて言ったらバカじゃないかと思われた。それが今では、「ソレはおかしいよ」って言えは、「そう言えはそうね」ってことになる。変りましたよ。底流は徐々にだけど変って来ている。どっちが多数派になって来るかって云うことね。歴史の流れだからゆうゆうと見ているの。

荒木 私たちのささやかな本「わいふ」も、少しでもそれに貢献できるのではないか、って気持ちでやっているわけですが……。

吉武 そうですよ。人数が多ければいいってわけじゃない。

組合なんかの活動は、男のメンツにかけてとやらで大人数集めて集会開くけど、個がないからなんにも変らない。

大きいことがいいことだとは思わない。三、四人でも、こうして寄って話し合っていればそれでいい。家に帰って隣近所と又話し合え

は……。

林 でも、いくら隣近所の人たちと話し合っても、差別のもとになっている構造改革の方に目を向けなければ……。

吉武 私は意外にのんびりしてるのよ。

だって、それまでは女は家庭で子育てをするもんだって思ってたのが、そこから一寸出て人々と交流するようになったけどもすいぶん変ってきているもの。

自分だって分らないことが多かったんだから、今何もしない人を責められない。分らないでシコシコ生きている人を、意識が低いなんて言えないですよ。

林 今の社会で、普通のこと、当り前のこと、とされていることを、おかしいな、って感じるか感じないかが大切ね。

吉武 当り前と思うのかオヤッ？と思うのかで大きく変わるのね。そして抱いた疑問を率直に主張する強さを持ってもっと大きく変わる小倉 何んでもいい、ちょっとでもいいから動いてみることでいいですね。（まとめ・林）



P T A 会員必読

## P T A 研究 二五〇円

学齢期のお子さんがありなら、あなたは多分 P T A の会員でしょう。

“一体 P T A って何なの？”と思われたことはないでしょうか。

皆が逃げまわる委員選出。委員になれば学校行事のお手伝い。発言すればにらまれる。総会の出席者はほんの一握り……。

これが P T A 本来の姿でしょうか。

いいえ P T A とは本来、教育への市民参加であり、日本の民主主義が草の根で問われている場所なのです。そのために私たちにどんな P T A が必要なのでしょう。

教育問題、P T A 活動の実践法を研究する月刊誌「P T A 研究」を読んでみて下さい。お申込みは左記へどうぞ。

発行所 全国 P T A 問題研究会

東京都新宿区新宿2-19-13

はるぶ教育開発研究所内

電話 03 三五四一八三七一

振替東京二四三一三〇

未来小説（連載第三回）

## 未知の領域

和田好子



エンライは返してもらったけれども、ぼくは家へ帰ることを許されなかった。

アサコに電話をかけさせられ、おばさんの家に泊るとウンを吐かされた。こんなウンは晩きり効きめはないのであるから、その先どうなるのか、もしわれわれが釈放されないなら、どうかアサコが適切な処置をとってくれるようにぼくはそこに希望をつなぐほかなかった。彼女はすばらしい判断力を持っているのだから……もし下手なさわき様でもされたら、それこそ彼女自身も危くなるのだ。

それから目かくしをされ、自動車で連れ出された。ぼくはエンライをひしと胸に抱いて、殺されても離すものかと悲壮な覚悟であった。

自動車は前回と違い、非常に長い距離を走った。時速二十キロでは長距離向きの乗物ではないから、ふつう自動車で長途の旅行をすることはなく、高速無軌道電車や、国際間ともなれば飛行機、ロケット、高速船舶が用いられる。

自動車はほんの近所まわりの乗物なのに、ずいぶん長いこと走るので、ふしぎに思った。しかも道が悪いとみえて、たいへんなゆれようだ。走ること数時間に及び、エンライが火のつくように泣き、原因は腹が減ったんだとわかっていても、どうすることもできなかった。

はじめ同乗の連中は、エンライの泣き声を無視していたが、ついには怒り出した。

「ガキを黙らせろ！」

「どうしろというんだ？」

「ぼくはいい返した。」

「こんなに引っぱり廻すからさ。腹が減りゃあ、赤ん坊ってものは泣くんだよ」

「人氣のないところだからいいようなもの……」

中の一人がこういったので、山の中か森の中か、とにかくさびしいところを走ってるんだとわかった。

しまいにエンライは泣き疲れて眠ったが、そのときはぼくのものども、子守唄を歌いづめでカラカラに干上るといふ始末。他の連中もホッとして、大きなため息をつくのがきこえた。

やがて車は舗装道路に入り、また一時間ばかりも走って、ようやく止まった。

目かくしのまま下ろされたぼくは、建物の中に連れ込まれ、階段を上がり……、突然、今までの男たちとは違う声が、こう言った。

「ヤア、よくおいで下さいましたね」

それは、明せきで上品な言葉だった。続いて誰かが後に廻り、目かくしをとった。

ぼくは、大きな、美しい部屋のまん中に立っていた。見えたのは白髪、長身の紳士である。彼は今はずした目かくしの黒布を、むぞうさにかたわらのテーブルの上にはうり捨てて、ぼくを見てにっこり笑う。

ぼくを運んだ男どもは姿を消していた。

「あなた、どなたですか？」

重いエンライをすり上げながら、ぼくがとんがった声できくと、紳士はますますにこやかに「あなたのパートナーです」

彼は長椅子にクッションを並べて、エンライを寝かすようにすすめた。ひざかけとおぼしき毛布を持ってきて渡してもくれた。

「じき泣くでしょう。腹が減ってるんですよ」

「それはいいけません。連絡を受けてから、さそく育児のできる人間を呼び寄せておきました。その人が赤ちゃんのお世話をするでしょう」

「それは困る。ぼくはこの子を離すわけにきませんからね。ダメだ、ダメです！」

「まあ、とにかく」

と彼はぼくをなだめた。

「今はよく寝ているじゃありませんか？ こちらへおいでなさい。あなたもいろいろご心配でしょうから、肝心なことだけ、まず話し合っておきましょう」

彼と向い合ってすわると、

「お酒はいかが、お好きですか」

「酒どころじゃないよ」

「まあ、そうおっしゃらずに。お近付きのしるしに」

われわれの横にはりっぱな茶卓が置いてあった。ぼくの専門的知識によれば、数百年もみがかれて使われてきたらしいマホガニーである。こんなものはふつうの家にあるものじゃない。

その上にグラスが二つと、数本の酒びんがあった。

ぼくは酒が好きで、食事ときに無ければもの足りないくちだった。子守唄のどが干上っていたせいもあり、こはく、色の液体をみたしたグラスをすすめられると、手を出さずにはいられなかったのである。

それは甘く、舌とのどにしみわたって、はなはだうまかった。

「これはリキュールですが、古い製法を用いて、われわれ仲間ですくっているものなんです。たばこはいかが？」

たばこ！ それはとうの昔、われわれの社会から追放された麻薬であって、それが全世界にはびこっていた当時、大気は汚染され、人々は肺ガンに犯されたといわれている。ぼくは恐怖をもってさし出された薬巻きタバコを眺めた。

よくこいつ、死なないもんだな！

火をつけて、紫の煙を吐きはじめた彼を呆れて眺めていると、

「たばこは鎮静作用があるんですよ」

「イヤ、けっこうです」

「それではお酒のほうをどうぞ」  
ぼくはすすめられるままに、二、三杯、甘い酒を飲んでしまった。

彼はおもむろに、タバコをふかしつつ自己紹介をはじめた。

「わたしはワタナベ・ミメイと申します。ご

らんのように、もう年をとってしまっていて、二三九〇年の生まれです。前世紀の遺物ですが、まだいろいろ、仕事をしたいという気はありましてね……」

聞いているうちに、ぼくは気分がおかしくなってきた。胸の中が煮えかえるように熱くなりクラクラと目が回った。

「タ、たすけて！」

ぼくは逃げようとして、倒れた。部屋中が大地震もかくやとゆれる。毒を飲まれたと思った。

「お酔いになりましたな」

ミメイ氏が悠然と立ち上って、こっちへ歩み寄るとみて、ぼくは意識を失ってしまった。

たいして長い時間ではなかったらしい。長椅子の上ではね起きた。頭が痛い、吐気がする。そのイヤな気分に加えて、ぼくが横たわっていたのは、なんと、さっきエンライを寝かした長椅子ではないか！ ではエンライは？

ミメイ氏はかたわらにすわっていた。

「お子さんは安全にお預りしてありますよ」  
ぼくの不甲斐なさ、思慮の足りなさは今思っても歯きしりが出るほどだ。

ぼくはミメイとかいうその悪漢をなぐり飛ばすかわりに、体中の力が抜けたような絶望感で泣き出してしまった。

「どうしてこんなひどい目に……合わなきゃならないんだ……エンライ……エンライ……ア

サコ……ああ、助けてくれよう」

「今ではアルコール度の低い酒しかありませんからね。あのリキュールは口あたりはよろしいが、四十五度ある。お酔いになったんですよ」のちによくのみ込めたことだが、現在の酒はアルコール分十二度以上のものはないので、ぼくはそれが酒だと思って暮らしていたのだ。ミ



カット：野口 淑子

イ氏の酒は昔の処方どおり、四十五度もあったんだから耐ったものでない。

結局、その晩は頭痛と嘔吐でフラフラで、長椅子の上に寝たっきり、憎むべきワタナベ・ミメイに介抱してもらった始末であった。

ぼくをおとなしくワタナベ氏のところまでひっぱって行きためただけに、エンライは一時ぼく

の腕に返されたに過ぎなかった。

こういうわけで、ぼくは秘密組織の一員となり、ワタナベ・ミメイという老紳士のパートナーとなって、組織の命する任務を遂行しなければならんことになったのである。

はじめの数日間は、不安と焦慮でいても立ってもいられないぼくを、ミメイ氏が極力なだめなくさめるためについやされた。

その時期が過ぎ去ると、ぼくの気分も落ち着いてきて、覚悟がきまったというか、これはとにかく冷静に事に当って、チャンスを待ち、局面の打開をはかるほかはない。それにはまず相手方に協力的にふるまって、うまく隙をねらってやろうという考えが固まった。

「どっちにしても、こうなってはもうしかたがありません」

ぼくはミメイ氏に話した。

「子どもの安全さえ保証して下さるなら、ぼくは何でもやります。ただし、近い将来、もとの生活にもどれるようにして下さい。それを約束して欲しい」

ミメイ氏はどっちもご希望に沿うと固く受け合った。

彼とぼくがやることになった最初の仕事はすいぶん奇妙なものだった。

ぼくの清掃局での仕事の内容について色いろと聞かれてから、都立博物館へ清掃局員と名の

って入りこみ、ある物を盗み出せといわれた。

「それはむりです。博物館なんて、管理厳重であんなうるさいところありません。まず品物の手入れにいくには、博物館長から清掃局長への依頼書が必要で、それを持っていかなきゃ、いじらしてはくれませんよ」

「わかっています。依頼書はちゃんとこしらえてあります」

つまり彼らがぼくらを誘かいしたのは、単なる思い付きではなかったのである。

ぼくが清掃局員であり、美術品の掃除も経験があることを調べ、利用価値ありとみて捕まえたに相違ない。彼らのたぐらみの奥底はどの程度深いのだろうか。ぼくは真っ暗な洞穴をのぞき込んだようにぞっとしたが、とにかくいうことを聞くはかなかった。

組織は清掃局員の作業衣まで用意しており、ぼくは顔みしりの館員に身元確認をされないように、カツラとつけひけで変装させられて博物館へ送り込まれた。

彼らが盗み出しを命じたものは、数百年前のライフル銃である。

現在、このような武器のとり扱いははなはだむずかしいものになっている。銃器は私有を許されず、公有のものも、猛獣の危害をふせぐとか、害獣がふえすぎた場合に射殺するとか、さしせまった理由がなければ使用されない。人間に対する使用は論外で、どんな凶悪犯も射つこ

とはできない。もっともそいつが逆に銃器を持っていた場合は使用できるそうだが、そんな大事件は聞いたこともないし、昔各国にあった死刑という野蛮な刑罰はもうろくない。

ぼくも生れてこのかた、博物館以外で銃器を見たことはなかった。

ごくまれに……十年ばかり前にも世界を震か

んさせた騒動があったが……国際紛争の結果、当事国がひそかに連邦法を犯して、武器を製造

することがある。そのたびに連邦政府が間に入

って、なんとか行使をさしとめてきた。十年前

のは、飛行機に爆弾をつんで、相手国を爆撃し

ようとしたもので、ロジックは連日数百年前の

世界大戦のフィルムを流し、爆撃がどんなに悲

惨な被害をもたらすかをがなり立て、人々は恐

怖のあまり食事ものを通らぬ思いで、連日こ

とのなりゆきを議論して暮し、交通機関は止ま

る、生産その他職場の活動も、無断欠席やら爆

撃反対ストライキやらで一切停止してしまい、

にもないということが、この油断の原因であらう。彼らは賢明にも、そこに目を付けたわけだ。ぼくの態度は清掃局の職員として、もちろん完ぺきである。偽造依頼書を示して、陳列品の銃をたくさん出してもらい、一室をあてがわれて掃除にかかり、最後に掃除道具に見せかけて持ち込んだ偽造銃……外見はほんとにそっくりにできていた……と本物とをすりかえて逃げ帰った。

数日か、数週間か、バレルまでの間に、組織は計画を完遂しなければならなかった。

ミメイ氏の家は、自動車でさんさん走ったも

道理、旧東京の牛込地区にあったのだ。例の大

地震以来、この台地の下まで海が押し寄せてお

り、台地上は昔住宅地だったということで、保

存されている遺跡もなく、雑木のうっそうとし

た森にかえってしまっていた。

人跡まれな地帯だから、ミメイ氏がライフル

を手に入れて以来、古書と首っぴきで射ち方の

練習をはじめても、銃声を聞くものもなく、怪

しまれるおそれはまったくなかった。

その日、ぼくは二階の窓から、ミメイ氏のは

だが、その日はなんとか人の出入りが多く、さまざまな物音がきこえた。部屋ベヤの掃除の音、台所の鍋や食器の音……。

すると、森に向かって立っているミメイ氏の背後に、ゆっくりと歩み寄る男があった。

ぼくは心臓は早鐘のように打った。  
男はミメイ氏の肩をたたき、二人は親しげに握手をし、抱き合いさえた。兩人とも、よほどこの会見が喜ばしいらしい……。

あいつなのだ！ ダテ・ゴロゾウだ！  
畜生め！ そうか、貴様がこの黒幕か！

よくも、よくも、同窓のおれを売りゃあがったな！

ぼくはそれまで、ダテとこの事件とを結び付けて考えていなかった。すいぶんうかつなようだが、男権回復運動のグループはたくさんあり、それぞれパンフや雑誌を発行したり、集会を行ったりしており、ミメイ氏らのように誘いだの、銃器の盗み出しだのという、おっかないことをやるような、犯罪的なのは聞いたこともなかった。

ダテについてはぼくは、この合法グループのアクティブだと思い込み、ミメイ氏らとの関係など、想像もしなかったのである。

ところが今や、ダテはぼくの悲劇の舞台に登場してきて、恨み重なるワタナベ・ミメイと、楽しげに親しみ合っているのであった。

ぼくの体中の血液は、手から足から逆流して

ことごとく頭にのぼり、髪の毛の一本一本に流れ込んでそれを逆立てるように思われた。

ぼくはまったく理性を失った。

部屋の窓は釘付けにした上、板を縦横に打ちつけて開かないようにしてあったが、いきなり素手でその板を引きはがしにかかると。

ぼくは体が大きい……一八五センチという身長は、現代の男としても大きなほうで、腕力も強かった。力にまかせ、ベリベリと厚板を引きはがし、その板で窓ガラスをこっぴみじんに突き破った。

次の瞬間、ぼくは残りのガラスを体当りではね飛ばしながら、階下へ飛び下りたのである。

「キサマーッ！」

おめき叫んでぼくがかけ寄ったときの、ダテ、ワタナベ兩人の恐怖の表情といったらなかった。ぼくはまずミメイ氏の手から、ライフルを引ったくり、それをふり上げてダテに打ちかかった。

ダテめ、キャーというなり地べたにころがって、ごろごろと数回回転し、這いすって逃げようとするところを、ライフルの台尻で思いきりなぐりつけた。残念ながら当たったところは尻であった。

イテテテ！と泣き叫びながらも、彼は立ち上って、森にころがり込む。ぼくはそれを追って「オノレツ、動くな！」

と叫ぶなり、ライフルをかまえて一発、二発。

どうして銃が射てたのかは、落ち着いてから考えてみればふしきでも何でも無い。ぼくは銃の分解掃除をした。それから、何日間もミメイ氏が庭で練習するのを見ていた。性来器用なぼくは、意識せぬ間に、こうして、ああして射つんだと、その方法を会得していたのであった。手応えあって、キャーという悲鳴。

そのときの気持をいえば、痛快の一語につきる。連邦法を犯して人間を射たのであるが、良心の痛みなんか少しもなかった。

すでに、家の中からは、組織の連中がバラバラと飛び出して来ている。

ぼくはついさっきまで、こわかった彼らがちっともこわくない。

「キサマらも射ち殺してやるか！」

ライフルは二十連発であることをちらと思いうかべて、銃口を彼らに向ける。

パニックが起り、彼らのある者は家に逃げもどき、ある者は森にかけ込み、ある者はその場で腰を抜かしてしまった。

こんなおもしろいことがあろうか！

高揚したぼくの気分冷水を浴びせたのは、さっきの場所に突っ立ったままだったミメイ氏の一言である。

「銃を置け！ 置かぬと子どもの命はないぞ！」

全身総毛立ってガタガタとふるえたが、ぼくは降伏しなかった。

「畜生！ ようし、ヤルならヤレ！  
きさまら全員道連れだ！ 一人残らず射ち殺して、おれも死ぬ！」

どなり返すなり射つ。ミメイ氏は瞬間カエルのように這いつくばったので、命を拾った。仕損じたり！ しかし彼が起きる前に、ぼくはかけ寄って背中を思いっきり踏みつけ、銃口を頭に押しあててやった。

「さア、チーズおろしみたいに穴だらけにしてやる！」

ぼくが台所の壁にかかっていた、使いなれたそれを思いうかべつつ叫ぶと、

「まあ待ちなさい」

意外に落ち着いた声でミメイ氏、

「取引きということもあらうじゃないか。きみだって、死んで嬉しいこともないでしょう」

「子どもを返せ！ 取引きというんなら、返せ！ それ以外ダメだ！」

「よろしい。ことと次第によっては返します」  
「いますぐだ！」

「ここで子どもを返してもらったとして、それで無事にことが済むと思うのですか？」

相手は新たな脅迫にかかった。

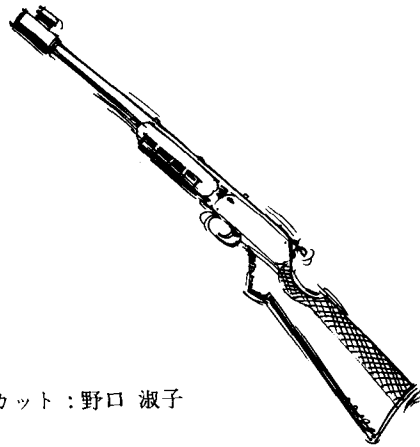
「きみが一生、そのライフルを握りっぱなしに握っていたところで、われわれの組織の復しゅうから逃れることはできないよ。」

われわれがどういう場合に、子どもを返し、安全を保証するか？ それは、きみが任務を終

えたときです」

「この上、何の役目があるんだ？ ドロボウまでしたじゃないか！」

「きみ、とにかくわたしを起こしてくれたまえ。いろいろな話がある。思えばきみとわたしはこの仕事ではパートナーであるのに、どんな仕事か、何のためにそれをするか、話して



カット：野口 淑子

なかったのは悪かった。それがきみを不安にさせるのだと思う。

「さあ、足をどけてくれたまえ」

「よくにとって、選択の巾はなはだせまかった。今すぐ破滅するか、それとも時期をのばしあてにならない可能性に賭けるかだ。」

ぼくの精神は正常だから、この場合後者を選

ばざるを得なかった。しかしライフルは手離さなかったのである。

ミメイ氏は立ち上ると、悠然と衣服の汚れを払いなどし、それから逃げ込んだ連中にむかって、

「オーイ！ 怪我人を助けてろ！」

それからぼくの腕をつかんで、門の方へ歩き出した。

ぼくは彼らがダテ・ゴロゾウの倒れているところへ、かけつけるのをちらと振り返った。

ダテの生死は、やっぱり気になった。

われわれは門を出ると、左右からうっそうと樹々の枝のおおいかぶさった、大昔の道路を歩きはじめた。

ミメイ氏はまるで散歩でもしているかのような態度で、

「わたしは現在、あらゆる公職を退いていますが、こういうことになる前は、州政府の外務局に勤めていた人間です。」

外交官として世界中の国へ行きましたが、今世界はどこも同じです。知的労働にたずさわるものは女が多く、肉体労働にたずさわるものは男が多い。どうしてでしょう」

「あたりまえじゃないか？ 女は弱い、男は強い。頭は同じだ」

「昔はそうではなかった。昔、男はすべての重要な仕事を独占し、全世界を運営してきました。ことに、知的労働は男の分野であって、当

時男と女の頭が同じであるなどとは、誰も考えなかったのです」

「それは女性差別時代だ。そのくらいのこと知ってるよ」

「あなたは歴史を学んだんでしたね？ それじゃご存知のことだが、女性解放が進むにつれて、女の知的能力が目立ちはじめ、次第にあらゆる分野で成果をあげるようになってきた。男は逆に後退していききました。肉体労働なんて、もとは頭の悪い男だけがたずさわってきたのに、誰もが平気でやるようになった。あなた、大学を出て清掃局に入るものなんか、昔はなかったのですよ」

「そりゃ職業差別があったからだろう。今どきそんなものはないし、誰だって能力があれば大学を出るからね。大学出たから、掃除屋をやって悪いという法がどこにある？ 職業が何であれ、人間知的能力が高くて、教養があったほうがいいんだ」

「現代の常識はそれとおりですが……男の後退によって、世界の失ったものはないか？ それを考えたことがありますか？」

「べつに男は後退もせんじやないか？」  
「では女の進出によって、世界の失ったものは？ それは進歩ですよ。世界は進歩しなくなっちゃったんです。」

現代の車は時速二十キロだ、酒はアルコール分十二度だ。

昔は百二十キロで車をとばし、四十五度のウイスキーを、男は飲んでいたんです」

「女もそのとおりやってたらしいぜ。ぼくの歴史的知識によれば」

からかうつもりで言う、ミメイ氏は嬉しうにこりこりして、

「そうですとも、当時、男はより高いものだから、女は男のまねをしたのです」

それから、一転、すこぶる苦い顔をした。  
「今では男が女のまねをしています」

「だからなんだというんだ？ てめえら、だから何をしようってんだ？」

いらだったばくは立ち止った。銃の引金を引きたくって指がむずむずする。

「わたしは、連邦大統領に会ったことがあります。そのとき、すでに引退を決意し、運動にもかかわりはじめていました。」

で、わたしは彼女のこの問題についての考えが知りたくて、こういったものです。

「大統領閣下、男は昔、特権を持っておりました。女に助けられることによって、多くの仕事を成し遂げることができました。今や、男は特権を失い、みずから助けねばなりませんので、昔のように仕事ができません。それで政治・外交・学問その他、あらゆる分野に女が進出しその分だけ男は地歩を失いました。これをどうお考えになりますか？」

「けっこうなことじゃありませんの？」

大統領はいうんだ、

「男と女が何でも分けあって……労働時間まで分け合って、仲よくやってるんですもの。男はよほど楽になりましたでしょ？」

「男の特権とともに、失われたものがございます、閣下。それは進歩です。昔、男は宇宙帝国を夢みましたが、女は地球だけあればいいんだといひます。男は無限の生産拡大をめざしましたが、女は必要なだけ、そして平等にいうのです。」

今やわが地球は、生産も、出産も、すべてが管理（コントロール）されております。管理こそ現代の原則であり、女の原則であるのです。これでよいとお考えですか？」

「どこが悪いのかしら？ わたくしわかりませんわ」あいつはぬかした。

「男が女に助けられる特権を失ったっておっしゃるけど……女に愛される特権はお持ちでしょ。それは永久に失われることはありませんわ」

そのとき、わたしは決心したのです  
「ミメイ氏はいやな目つきでばくをみつめた。『彼女を暗殺すること』」

連邦大統領は連邦府ローマに在り、四十六才のアメリカ女性で、彼女の日本訪問はこの年の初めから報じられていた。

その期日は、すでに数日後に迫っていたのである。

（次号へつづく）





## お。い。や。べ。り。

ハガキにエンピツ。それだけで書けるコーナーです。何でもどうぞ。

初めて「わいふ」を手にとり、読み通した時には、今までの日常性に埋没してしまいそうな毎日に新しい光を感じました。つまり、自分の立場を自分なりに考える、客観視する時間があるというとても嬉しい気持ちでした。それと同時に、私の求めているものと少し違うようにも思っていたのです。それが142号「第一回わいふ合評会」を読んではっきりしました。最後の発言に「……全部『女』から一歩も出ていない。繰り返し『主婦』の立場で、夫、子ども、家事から脱出できない。もっと別の立場で……」とありました。

私も結婚して五年目、三才と一才になる子どもをもち、育児と家事に忙しくしている毎日です。

す。本を読んでも、テレビを見ても、友人とのおしゃべりでも、結局はいつも子どもの事、主人の事が頭にあるような毎日なのです。これでは、自分にも、又、子どもや主人にもよくないと思っているのです。自分自身の世界を持ちたいという願いは強いのです。

その意味でも「わいふ」が、今後もっと「人間としての立場」からという広い内容も盛り込まれたらよいのではないかと思ひペンを取りました。

杉並区 安岡 厚子

「わいふ」という名の雑誌があると、毎日新聞で知った時、私は体の中を急に血が騒ぐおもいにかれました。ワイフ、この呼び名は永い年月私はすっかり忘れておりました。三十四年前、大東亜戦争の最中に私は山形県より考えたこともない群馬県に嫁いで参りました。すぐ任地の満洲に渡り、主人は私を友人達に、ワイフですと紹介しました。田舎者の私にはワイフという言葉のひびきが、いかにもしゃれた感じでした。

現在は夫六十才、私五十七才となり、互に何

もかも宥しあえる年となり、これも老の証かと少しさみしく思えるときもございます。

皆様の年齢の頃私は毎日の生活に追われて生きるのが精一ぱいでございました。物資が出廻りまして時代も変り、一見幸せな満たされた生活の如く思えますが、人間の欲望とは果てしなく求め続けるものの様で、それ故いつもその時代なりの苦しみがつつわるのだと存じます。

沼田市 荒井 良

「わいふ」一四二号が届きました。私は先月から会員になったばかりで、毎日新聞で知りごく軽い気持ちで申し込みをしたのですが、読んでみると予想外に面白く、こんなに次号を待ちかねる雑誌は初めてです。きっと毎号必ず前の号に関する意見とか反論などがあり、通り一ぺんの記事という感じがないせいだと思います。

一番共感したのは私と同一年生まれの中原様の投稿です。「忙しいけれど退屈」「子供は何よりも可愛い、育児は自分の手でやりたいが自分のこともやりたい」その結果周囲のヒンシュクを買いながら子連れでバタバタする気持は、我々の母親の世代にはどうしても理解できぬら

しく、いつも実家の母には「勉強なんか子供が  
大きくなってヒマになった時すればいいでしょ  
う」「無理して体こわしたら一番困るよ」など  
と言われております。

ところでこの雑誌の編集部は個人のお宅にあ  
るようですが、資料やバックナンバーの保管な  
どどうしていらっしゃるのですか？

柏市 四方 愛子

バックナンバー其の他は田中宅で保管し  
ています。家中本だらけ書類だらけで惨た  
る有様です。

編集部

一四一号、和田好子さまの「未知の領域」興  
味津々です。マスコミに載せてひろく多くの  
人々に読んでもらいたいと思います。「夢」で  
はないと思うし、「夢」であってはならないし、  
現実には個人生活のなかのある部分でこれに近  
い夫婦関係をもっている人が私の住む地方都市  
にだってあるのですから――。

大津市 中野 桂子

特集「日本のおばあさん」は、本当にいろ  
ろの意味で学び教えられました。中でも後藤さ  
んの投稿「おばあさん学生」を読み終えて、う  
ーんと、うなっていました。

恵まれた健康、知性に加えて、たゆまぬ学

心と努力、そして、すばらしい行動力、周囲の  
なにもにも甘えることのない強い心などなど。  
自分をふりかえり自問自答するとき、ずうー  
っと若い私が、何と消極的で怠惰な日々であっ  
たことか……。

ものを書く人、考える人が一番ボケないとか、  
私もいつも何かを考えていたい。そしてあのよ  
うな高い境地を目標にしたい。

後藤さん、ますますお元気でがんばって……の  
声援にそえて、私は惜しみなない拍手を送り続け  
ます。

東京都 工藤志満子

灼熱の地、アラビア半島の一角よりお便りさ  
せていただきます。皆様方のご活躍を毎日新聞  
紙上で知り、その紹介にありましたテーマや主  
婦である人の活動、ということに、興味を感じ  
させられました。書いてあったように、苦労も  
さぞやとお察しします。以前にも「わいふ」誌  
のことが載っていたように記憶しています。

私も書くことが好きで学校時代、社会に出て  
も、機会があれば書いてきましたが、結婚して  
からは、子供が出来たり、何やかやで、書きた  
いとは思っていても一度も書きませんでした。  
しかし、二人の子どもも幼稚園に通うようにな  
り手もかからなくなりました。

結婚してからは、何となく人間が小さくなる

気がしています。すばり主張し合うーというこ  
とが主婦の間ではないということです。その時  
その時、適当に合づちを打つーこれが人間とし  
て成長している、或は立派な奥さんでしょうか。

クエイトにて 野田ひろ子

「老いるということ」伴野正枝は五十四才の  
私にとって大変参考になりました。

わいふティーチンの「平等について」の中  
に「妻の労働の価値を、そのまま妻の人間とし  
ての価値としておきかえているのなら、彼ら  
は能力主義に毒された傲慢で浅薄なひとと呼ば  
れても致し方ないことだろう」……人間とは  
何であるか、人間はなぜ尊重されねばならない  
のか……西欧文明の底に流れるこの認識はつ  
いに（日本に）根づくことはなかった」

「老人と性」の中に

「生あるかぎり、人は愛する。……性の力によ  
って、人は自我の牢獄を脱け出し、はじめて真  
に他者を見出すことができる」

等の言葉は人間の原点に迫る深い意味を持つ  
言葉だと思えます。

「わいふ」は形式はしろうとくさくて親しみ  
易く、内容は非常に高度なものを含みよい誌で  
あることが解りました。

大田区 斎藤 芳枝

三十も半ば過ぎ、二人の息子たちも手がかからなくなり、仕事をしている時は夢中で一日が過ぎていってしまうのに、ここ数日家事以外何もする事がなく、久しぶりの休日を満喫していた矢先の事で、二冊一気に読ませていただきました。

私も仕事上（和文タイプ）色々な物に接してきましたが、主婦という立派な職業のかたわらこれだけの編集を少人数でなされる事は大変な努力と、周囲の暖かい協力があってこそなされるものです。

自称好奇心の強い女。今回もこの機関誌を通して色々な方とお近づきになったのです。自分の思考等、同年輩・境遇にある人はどの様に感じ、実行しているのかしら、と何かに直面した時思う事度々です。

川越市 田中美代子

毎日新聞で「わいふ」のことを、初めて紹介された時から、あ、これはいいな、さっそく」と思って短い二行の切り抜きをスクラップにとめ、又二回目も「人」の田中さんの記事を見て、それもスクラップにつづった。三回目の紹介で、もうどうしても、よし、私も仲間に加わってどんなものか知りたいたいと思い、申込みてからの「わいふ」が届くのが待ち遠しかったこと。

「わいふ」が届いた日は、「わいふ」を持っ

て、公園で読もうと思い、二才九ヶ月の息子と、一才四ヶ月の娘を連れて行ったが、夢中で読んでいたら息子の顔には、大きい子から砂をいっぱいかけられ、目にはいる寸前でワンワン泣いていた。

こんな調子だから、何かを書くといっても、時間ができるのは、ほんの少しだけれども、皆さんと一緒に楽しみながら、仲間に加えてもらおうと思っています。

横浜市 古沢 房子

中学三年頃から○・ギリギリの近視で、メガネをかけない世界はいつもボンヤリかすんでいた。それがこの頃メガネなしで、葉っぱの輪郭などがいいやにはっきり見えたりする。最近特に目を大切にしているわけではないし、相変わらず使いっぱなし。「どうしてかな？」と、先日話のついでに母に言ったら、「そりゃあなた老眼が始まったのよ」こともなげに母は答えた。イヤダー、ヒドイヨとむくれたけれど、私もいつか老人になる。必ずなる。

「わいふ」一四二号と前後して、ある雑誌の老人特集を読んだ。「わいふ」の中では見られない、もっと醜い、生々しく恐ろしい老人の境遇があった。そして、親だから仕方なくめんどろを見ているというその息子たちの苦労話は、親不孝者と言いつても鋭さでかなしかった。

精一杯その人なりに生きて年老いた時、そんなにじゃけんに扱われても、人はそれでもなお生き続けたいと思うのだろうか。生への執着がそんなに強いものなのか、今健康で暮らす私にはわからない。

ただ、今はこう思う。

もし私がじゃま者以外の何物でもなくなったときは、その少し前にそれに気づこう。そして、誰にも迷惑かけない方法で自殺しよう。そんな勇気を持って老人になろうと思う。

乱暴かな、冷酷かな。ごめんさい。  
明日は三十七才の誕生日です。

練馬区 吉羽 芳子

へたの横好きなのですが、読む、書く、話すことの好きな私は四十四才花の中年などと云いますが自己嫌悪になることしばしば。家事家計グループ（友の会）、地域ボランティア、和歌の会などに首を突込みまた「わいふ」に参加する。我ながら欲深すぎるのではないかと案じています。

夫四十六才、長男十八才、長女十六才、次女九才、の五人が一つ屋根の下に住んでいます。

夏休みの数日を学童保育に出かけて、そこで出会ったおばあさん先生は六十五才を過ぎてなお男児を相手にあの日盛りにキャッチボールに興ずる、石けりもするとうふうでスタミナおばあさんでした。寝たきり老人に接することの多

い私にはこのおばあさん先生がまばゆい程に見えたものです。こんな時は自己嫌悪はどこかへ吹飛んで、もりもり働く意欲が湧いて来るのです。

三鷹市 阿部 一枝

最初、目次を見た時、大きな新聞、雑誌でなじみの名前が目につき、「ああ、ここにも」と少々がっかりしましたが、「考える」ことにはプロもアマもないと気を取直して読みました。

今回の特集、主人の理解のもとに、一人娘である私は、妻を亡くした父と同居していますので、自分の問題として読みました。自分のどこかに自分の親である父がじゃまものに思える時があり、核家族を羨しく思ってしまう、自ら愕然としてしまいます。 横浜市 武田 睦 30才

結婚して五年目を迎え、子供も満三才となりあと一人女の子が欲しいなあという気持ちを抱いたものの、子宮外妊娠、手術、田舎の母のもとで一ヶ月余り養生、涼風のたつ九月、やっと我が家で親子三人水いらすの毎日、と思ったのもつかの間、主人は二ヶ月間の出張とあいなりました(……)。好きな読書だけにちょっとしたもの足りなさを覚えはじめていた矢先、「わいふ」のことを知りました。ものを書く人が一番じゃないということ、私も仲間になっていたきたいと思います。

所沢市 高田 和子

一四二号を基にして、会員の方々を交えての「わいふ」第二回目の合評会をもちました。以下は、その時のまとめです。

\*

老人問題というと、とかく騒がれている割には意外にその実、真剣に取り組み考えている人が少ないのではないでしょうか。「いやでも老人になる」は、そうした懸念に対する警鐘乱打の意味合でも、大変考えさせられるものがありました。

\* \*

「子連れある記」は、嫁と姑、延いては世代の差から生じる様々な「ゆき違い」の問題を提起していたと思います。

若い母親の《子連れでも勉強しよう》という姿勢は尊重するとしながらも、その裏では、子どもへのシツケや日常の生活態度における己れとの違いを、我が身の経験だけを基準にして《非常識な》、《身勝手な》と評価してしまう先輩ママのなんと多いことでしょう。対話もなしに一部の面だけを捕えて、今の若い人は……と全体視してし

まうことだけは、せめても心していきたいものです。

\* \* \*

「老人と性」のルポでは、老いてから女性とは人間的なふれ合いのある関係を余り求めたがらない、或る種の男のエゴイズムを、まざまざと見る思いがしました。しかし、これは何も老人にかぎった特殊な問題ではないということ、そして、その意識の底に潜むものは一体何であるかということをおかしく私にはシツカリと把握しておかなければ、と痛感しました。

\* \* \*

## 合評会

全体的に見ると、肝心なところを避けて通っている感じ、あるいは「きれいごと」で片付けてしまっている感じの記事が多かったようです。

『開き直りになったにせよ、醜さをさらけ出すことになったにせよ、もっとムキ出しの生々しい声が欲しかったのに……』というのが出席者の意見でした。

(まとめ・鈴木)

## 投稿規定

投稿は原則としてすべて掲載します。

予約購読者はどなたでも投稿できます。

(一) 随筆、随想。テーマ自由

二千字まで

(二) 持込み原稿。形式、内容

長さ自由。特集テーマ原稿、評論、問題提起、文芸作品など。ただし、掲載は編集部で協議の上、決定いたします。

(三) おしゃべりコーナー。おた

より、家事のヒント、「わいふ」への注文など、葉書一枚から千字程度。

## △お知らせとおねがい△

これからの「わいふ」をどうするか。一年目の終りを迎えて、編集部ではこの問題と深刻に取り組んでいます。

まず第一に、皆さまのお声にこたえて、これまでの「わいふ」に一番欠けていた遊びの精神をもっと取り入れていきたいものと思っています。「考える」姿勢はどこまでも大事にしたいと思っておりませんが、次号からの「わいふ」はこの線に沿って、これまでとは多少趣きの変わったものになりますので、どうかご期待下さい。

投稿欄も大分充実してきましたが、生活の実感に即しながら遊びと笑いのあるものももっと欲しいような気がします。また投稿者が特定の方に偏りがちです。他の方たちは「わいふ」をどのように読んでいらっしゃるのでしょうか。ぜひお声をお寄せいただきたいと思います。

さて次年度を迎えるにあたり、継続のお払い込みをよろしく願います。またお一人でも、お二人でも、購読者を増やしていただければ幸いです。編集部一同、例外なく、現在の赤字経営のままで「わいふ」の継続は難しいという感想を抱いております。みなさまのご協力こそ、「わいふ」継続の最大の支えなのです。どうかよろしく願います。

## △編集だより△

▼十月二十九日、「主婦は職業か」のテーマで行なわれたティーチン、出席者約三十名。

主婦職業論と性的分業肯定論のつながりがはつきりしてきたようです。主婦問題の真の難しさはここに潜んでいるのでしょうか。

▼14号では、母親が他人や保育所に子どもを預けることの当否を考えてみようということになりました。個人としての母親の自由と子育てとの両立は、女性の最大の問題です。投稿をさりたい方は、一ヶ月末日までにお送り下さい。

▼宮城さん無熱性肺炎、和田さん貧血症、と編集部では病人続出。その代り昭和二十年代生まれのフレッシュ・ワイフの鈴木滋子さんが新しくスタッフに加わられました。でも、まだまだ手不足で悲鳴をあげています。編集にご経験のない方でも声をかけて下さいませんか（交通費はお支払いいたします）。

▼ではお元気で、よいお年をお迎え下さい。

〈わいふ〉 143号 1976年11月25日発行 定価 300円・年間予約 1500円・送料 720円

発行所・わいふ編集部 千162東京都新宿区加賀町2-3 田中喜美子方・TEL 260-5500・269-2388

編集・荒木弘子・田中喜美子・林 慶子・宮城道子・和田好子・鈴木滋子

印刷所・東京都新宿区岩戸町10 チトセ印刷 ★振替注文は東京5-110430 わいふ編集部へ

# 考える主婦のための雑誌—わいふ—

## 既刊特集 概要

### 138号 〈天皇とわたしたち〉

天皇の後妃たち／和田好子

天皇のしごと／亀山利子

天皇の給料／林 慶子

### 139号 〈日本の夫〉

夫必読のアンケート

東の夫・西の夫

性の終身雇用／大庭みな子

### 140号 〈家事を洗い直す〉

家事をどうとらえるか／武田京子

座談会・家事のねうち／樋口恵子

法律からみた家事／中島通子

### 141号 〈親のきた道・子どもの行く道〉

女の子の役割男の子の役割／塚本しう子

あなたのしつけはそれでよいか／富永孝子

イギリスの親子像／北詰由紀子

### 142号 〈日本のおばあさん〉

いやでも老人になる／森 幹郎

あなたは恍惚の人にならない／新福尚武

老人と性／田中喜美子

定価 300円

予約購読料 250円